

---

# セオニア王国戦記

CENTER

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セオニア王国戦記

### 【Nコード】

N3585I

### 【作者名】

CENTER

### 【あらすじ】

欠落領域と呼ばれる空間によって、世界の三分の二は挟られていた。

だがある日、その領域が異なる二つの世界によって埋められ、統合暦時代が始まることになる。

しかし、百五十年以上もの時間が流れた今も、三つの世界は共存できてはいなかった。

その世界の歪さが今、セオニア王国と呼ばれる王国で、一つの内乱を引き起こす。

その戦いの果てにあるものは

そんな話です。

内政や綿密な戦術論よりもケレン味重視で、読んでいてワクワクドキドキできる話を目指します。

## 第零話

世界は、欠けていた。

東西に長い巨大大陸である【オーセリア大陸】とそこから海を挟んだ【ヤマ列島】。

小さな小島を除くと、世界にはそれだけしか陸地が存在しなかった。

が、それは他の部分が海に沈んでいるという意味ではない。

人によって白とも黒いとも言われる謎の空間が世界をこっそりと抉っていたのだ。

その境界線は、何者をも阻むとも、その先の虚無に飲み込むとも言われ、誰一人として近づく者はいなかった。

【ラックテリトリー欠落領域】。

世界の三分の二はそう呼ばれる立ち入ることのできない領域だった。

だった。

そう、過去の話だ。

ある日突然、何の前触れもなく、【欠落領域】に海が、空が、そして大陸が現れた。

【オーセリア大陸】の東に、長く南北に伸びる【アクレイア大陸】。  
南西には【アクリファ大陸】。

【ヤマ列島】の南に【アイソニア群島】、さらに南に【トゥライオ大陸】。

その更に南に、氷に閉ざされた【ナトラティック大陸】。

これによって、【欠落境域】は埋められ、現在の世界地図が完成した。

埋まった大陸には、現大陸と大体同じレベルの文化、技術、魔法技術が存在し、同じような人間とモンスターが生きていた。

多少の文化の違いは存在したものの、生活水準がほぼ同じだったこともあり、各大陸の国を治める王たちの多くは手を取り合って生きていこうと決めた。

【欠落領域】は一度に埋まったが、他の大陸は全て同じ世界に存在していた訳ではなく、【アクレイア大陸】【ナトラティック大陸】と【アクリファ大陸】【アイソニア群島】【トゥライオ大陸】の組み合わせで別の世界に存在していた。

つまり、それぞれが【欠落領域】を抱えていた三つの世界が一つになったことで、ようやく完全な世界になったのだ。

ここから、この事件は【三界統一】と呼ばれるようになり、この

年から【統合暦】という共通の暦が導入された。

一つになった世界で、人々は手を取り合って生きていくはずだった。

だが、その前に一つの問題が立ちはだかることになる。

その問題を話すために、まずは魔法というものについて説明しなければならぬだろう。

魔法と言うと、何でもありの便利な能力のような誤解を受けることがあるのだが、魔法は不思議な力でもなんでもない。

きちんと原因があって結果が導かれる、一つの学問なのだ。

その原理は至って簡単。

一言で言うならば、『世界を都合よく書き換える行為』だ。

この世界には、【虚数<sup>イマジナリ</sup>原子】と呼ばれる不可視の物質があらゆる場所に存在する。

物質を分解すれば原子にたどり着くように、【虚数原子】は現象の最小単位となる物質だ。

世界の全ての現象は【虚数原子】の数や配列によって決定されているのである。

つまり、それを弄ってやれば、理論的にはあらゆる現象を操れるのだ。

だが、通常の状態の【虚数原子】はこの世界の管理下にあり、人が干渉することはできない。

それを可能にするためには、人自身がもつ【虚数原子】を世界に放出しなければならない。

どこにでも存在する以上、人も当然【虚数原子】を持っている。

その【虚数原子】は各個人の存在によって、微妙に変質している。わかりやすく言えば、世界に満ちている【虚数原子】が透明なのに対して、人の【虚数原子】は人間によって異なる色が着いているのだ。

それを世界に放出することで、無色の【虚数原子】に色を着けて、その個人に扱えるようにするのである。

そうやって、自分の管理化に置いた【虚数原子】を詠唱などの儀式的行為によって配列し、現象を操る。

これが、魔法の原理だ。

世界の【虚数原子】への干渉や、個人の保有する【虚数原子】の量、得意な配列などには個人差があり、これが魔法の才能や得意とする属性などに関わってくるのだが、それはここでは関係ないので割愛する。

話は戻り、問題となるのは、【虚数原子】を世界に放出するといふ行為である。

【オーセリア大陸】 【ヤマ列島】 に住んでいた人々は、この行為を行うとき足元に円形の光 【魔法陣】 を伴う。

だが、【三界統一】によって増えた大陸の人は、それとは異なっていた。

【アクレイア大陸】 【ナトラティック大陸】 に住んでいた人々は、背中に白い翼状の光 【白翼陣<sup>はくよくじん</sup>】 を、

【アクリファ大陸】 【トゥライオ大陸】 【アイソニア群島】 に住む人々は、背中に黒い羽状の光 【黒羽陣<sup>こくうじん</sup>】 を伴うのだ。

それだけならば特に問題はなかったのだが、それを問題としたのが【アード教】の存在である。

【オーセリア大陸】の西方に位置する【サルク・エルス聖教国】を發祥の地をするこの宗教は、死後の救済について説き、全人口の七割という多数の信者を抱えていた。

その教義は、人を導き守る存在である天使と、人を墮落させる存在である悪魔が登場する。

そして、鳥のような白い翼は天使の、蝙蝠のような黒い羽は悪魔の特徴なのである。

アード教徒は【白翼陣】を持つ人々を天使のような人、【天人<sup>てんじん</sup>】と呼び称え、【黒羽陣】を持つ人々を悪魔のような人、【魔人】と呼んで迫害した（ちなみに、自分たちは天使と悪魔の間の人として【人間】と呼んだ）。



最初は戸惑っていた【天人】も、次第に称えられるのが当然の風潮に慣れ、謂れのない迫害を受けた【魔人】は当然反発した。

その結果、【魔人】は乱暴で悪い奴という見方が強まり、更に迫害が酷くなるという悪循環が生まれてしまうことになる。

そして、時は流れて現在 統合暦162年。

【天人】【人間】は共存し、【魔人】は自分たちの大陸で鎖国状態という状態で、世界は一応の安定を見せていた。

ここで、ようやく物語の舞台へと話が繋がる。

舞台となる国の名は、【セオニア王国】。

【オーセリア大陸】のほぼ西端に位置する中規模の国だ。

はつきりとした四季を持つ、自然の美しい国である。

この国で起こった戦い。

それが、やがてこの世界の全てを巻き込む騒乱へと発展していくことを、今はまだ、誰も知らなかった。

第零話「序章。あるいは終幕の一場面」

【セオニア王国】の王都【ベルジーニア】。

国で最も栄えた都市に人影はなく、ただ無人の街が広がっている。王都を囲む壁の外の平原では、二種類の旗を掲げた兵たちが、入り乱れて戦っていた。

一方の旗は、青い月と剣の意匠　セオニア王国軍第五兵団【グ  
ラスムーン】。

もう一方は、黒い空に浮かぶ赤い月　最大の反王国組織【アビ  
スナイト】。

そして、その平原を見下ろす王城でも、戦いは行われていた。

戦いの傷跡の刻まれた屋上で、二人の青年の詠唱が、朗々と響く。

「至天の光よ　根源たる始まりの刻の力よ　我が願いの下へと集え」

白銀の髪を揺らして、蒼い瞳の青年が術を紡ぐ。

「冥府の闇よ　虚無たる終焉を誘う力よ　我が願いの下へと集え」

漆黒の髪を揺らして、紅い瞳の青年が術を紡ぐ。

互いに、その背に広げるのは片方ずつの【白翼陣】と【黒羽陣】。

この世界で最大の禁忌である、【天人】と【魔人】の混血の証。

【天人】にとっては穢れた血の混じった存在として。

【魔人】にとっては仇敵の血の混じった存在として。

【人間】にとっては二種族の交ざった異端として。

存在することが罪だとされた。

「幾万の悪意に阻まれようと 定めた心を貫く力として」

【天人】に父を殺され、【魔人】の手によって母を失い。

それでも、その日々には確かに光があったから。

「幾万の命を喰らおうと この心を貫くための力として」

三つのどの種族にも認められず、安息の地など見つけれられず。

だからこそ、その闇に押しつぶされぬように。

「全てを護る 我が意志に応えよ」

だから決めた。

この世界の全てを護り、いつか、この存在が認められるようにと。

「全てを滅ぼす 我が意志に応えよ」

だから決めた。

この世界の全てを滅ぼしてでも、力をもって、この存在を刻みつけよう。

「汝、その名を」

二人の声が揃った。

一瞬、蒼と紅が交錯する。

その瞳に、込められた想いは同じ。

『あいつを、認めない』

「ジェネシスルクス創世裁光！」

「ラインズジャッジ終焉審判！」

光と闇、二つの極限が満ちる

## 第零話（後書き）

用語とか大陸名とか色々でてきましたけど、そんなまじめに覚えなくてもいいです。

必要なときはそのつど説明しますから。

この作品は、数年前から友人のホームページに投稿していた作品だったのですが、友人が小説活動を停止したので、私の作品も撤去し、それを加筆修正してこちらで再公開することにしました。

内輪向けのページだったのでいいとは思いますが、もしも過去に読んだことがある方は「パクリだ!」とか思わないで下さい。作者本人です。

ちなみに、この作品と続編を含めた計四つの作品はこちらで既に完結していたので、自動的にこちらでも完結するかと思われま

す。安心してお付き合い下さい。

## 第一話A「硝子の月」(前書き)

修正) キャラ紹介でトワの漢字表記が間違っていたのを修正。  
キャラ紹介を少し詳細に。

## 第一話A「硝子の月」

【セオニア王国】。

【オーセリア大陸】の西端近くに位置する王制国家である。

北方は海に面し、東から南にかけて【ハルバニア王国】、西は【エリトリア王国】と接している。

【エリトリア王国】とは国境付近の鉱山を取り合う戦争を何度も行っており、かなり仲が悪い。

だが、四年前の戦争で【セオニア王国】に大敗を喫してからは、沈黙を続けている。

【ハルバニア帝国】は同盟国なのだが、最近、ある理由からこの国との関係は悪化している。

その理由が、【セオニア王国】の国王、オディフィル・セオニアの方針転換だ。

元々、オディフィルは賢王と名高く、三人種の調和を目指して政治を行っていた。

そのため、周辺の国から流れ込んだ多くの【魔人】が暮らしていた。

それと同じ理想を掲げているのが、【ハルバニア王国】の国王で

あるフィリオ・ハルバニアだ。

【ハルバニア王国】は国土の多くを山地が占めており、それゆえに、他国にはない珍しい兵を持っている。

それが、【竜騎士】と呼ばれる兵だ。

文字通り、モンスターであるドラゴンを調教して馬のように乗りこなす兵である。

【竜騎士】は、【ハルバニア王国】最強の戦力であり、幾度も国を護ってきた。

ハルバニア国民は、ドラゴン限定ではあるが、モンスターとの共存を行っている国民であり、その国民性ゆえか【魔人】も比較的あっさりと受け入れてしまったのだ。

この国民にとって、見た目での差別というのはあまりにも馴染みがないのである。

しかし、四年前にオディフィルは急遽方針を転換。

大部分の国と同様に、【魔人】の迫害を開始したのだ。

就職できる職業や入出国制限、理不尽な刑罰の重罰化や重税化。

さらには、高額税金が払えなくなった者は、土地が痩せていたり、モンスターが多く住む危険な土地に作った【魔人自治区】へと押し込んだ。



自治区と言えはそう悪くは聞こえないが、その本質は国からの援助を一切受けられないという意味だ。

【サンク・エルス聖教国】のような【天人】優遇政策は取っていないが、【魔人】の地位が低くなれば、相対的に【人間】と【天人】が幅を利かせるのが当然である。

それを知ったハルバニア側は強い抗議を行ったが、オディフィルの方針を変えることはできなかった。

最近では、同盟崩壊も時間の問題だろうと囁かれるようになってくる。

さらに【セオニア王国】は国内にも問題を抱えることになった。

普通に扱われるという理由から【セオニア王国】には多くの【魔人】が住んでいた。

当然、それだけ多くの【魔人】が急な方針転換の影響を受けることになる。

その結果、王国に反発する組織が大量に生まれることになったのだ。

多くの【魔人】が住んでいたのが仇となり、最近では規模の大小はあれど、問題の起こらない日がないほどである。

今日もまた、一つの戦いが起こっていた。

セオニア王国戦記

第一話A「硝子の月」

【セオニア王国】の王都【ベルジーニア】。

高い城壁に囲まれたこの都市は平原の真っ只中に位置し、広く周囲を見渡すことができる。

その平原で、睨み合う二つの軍勢があった。

セオニア王国軍第五兵团【グラスムーン】と反王国組織の一つ【春の雪】である。

旗印は美しいピンク色の花をつける樹　桜だ。

はつきりした四季を持つこの国では、この時期美しく咲き誇る花である。

【春の雪】は、その構成員をいくつかの町に分けて潜伏させ、王都近くで合流。

一気にその規模を膨れ上がらせ、【ベルジーニア】に向かい、それを王都から出陣した【グラスムーン】が迎え撃った形だ。

【魔人】の見た目での判断材料は魔法を使うときの【黒羽陣】しかないわけで、慎重に隠れられるとその判別は難しい。

【魔人】が次々に出て行く王都近くの町に、入れ替わりに堂々と【魔人】が引越してくるわけないだろうという考えの隙を突かれたのだった。

【グラスムーン】の団員はおよそ千。

対して、【春の雪】は約千五百人からなる集団だった。

仮にも王国兵団である【グラスムーン】の方が人数で劣っている。

これには、もちろん理由がある。

【グラスムーン】は、【魔人】あるいは【魔人】との混血の兵のみで構成される兵団なのだ。

人数は少ないが、しかし、【グラスムーン】は【セオニア王国】随一の戦闘力を有している。

現在の情勢でも王都に住むことを許されるほどの戦果を上げ、使い捨てとばかりに送り込まれる戦いに勝ち残っている間に、少数精鋭の兵団へと成長していたのだ。

【グラスムーン】の陣から、馬に乗った一人の男が進み出る。

黒髪に黒い瞳の若い男だ。

腰に軽く反った形が特徴の剣を下げている。

男は、大きく息を吸い込み、【春の雪】へと声を発した。

「僕は、グラスムーンの月齢の席、アキト・コクヨウだ」

アキト・コクヨウ。

【グラスムーン】に三人存在する最高幹部である【月齢の席】の一員で、大貴族であるコクヨウ家の次男だ。

と言っても、コクヨウ家は【魔人】の家系で、現在はその地位は失われてしまっている。

「君たちの行為は国家反逆罪にあたる。速やかに武装解除し、集団を解散せよ！」

その声に応えるように、【春の雪】からも一人の男が進み出た。

中年に差しかった年頃の男だが、貫禄という観点ではアキトよりも上だ。

二十メートルほどの距離を置いて、二人が向かい合う。

「我らは、魔人の正当な権利を主張するものだ。グラスムーンよ、この国の行く先を憂えるのなら、そちらこそ道を空けたまえ」

「正当な権利、か。僕は、それを頑張っているやつを一人知っている。あいにくと届いていないようだがな」

アキトの脳裏に、銀髪 of 青年の姿が浮かぶ。

「彼にもできないことが、君たちにできるとは思わない。そもそも、僕らは君たちの討伐を王に命じられている。あの方は君たちの話を聞く気など持っていない」

「それでも、聞いていただく」

「どうやって?」

「言葉を尽くせぬなら、無論、武力で」

「……そうか」

すっ、とアキトの目が鋭くなる。

「それなら、通すわけにはいかないな。

一度だけ言おう 降伏しろ」

「一度だけ答えよう。否と!」

その返答が、そのまま開戦の合図になった。

両陣営から、一斉に魔法詠唱の音が響く。

魔法とは、世界を書き換える技術。

そこにはいくつかの法則がある。

その法則が、自然に存在するものほど簡単だということだ。

例としては、普通に存在する火を作るのは簡単だが、光の矢のような、ありえないものを作る魔法は難しい。

また、同じ火でも、火球と火の竜巻では、実際にありえそうな火球の方が難易度が低い。

【虚数原子】への干渉でもっともポピュラーなのは詠唱だが、これにも法則が存在する。

基本的には、難易度が高かったり付加条件を増すと【虚数原子】の配列が面倒になり、威力、範囲を増すと【虚数原子】の量が増えて、どっちにしてもその分詠唱が長くなるのだが、個人差があるので一概には言えない。

例えば、誰かが『無数に分裂した火の玉よ』と詠唱するところを『火散弾よ』ですませられる人もいるということだ。

これは才能とセンスの問題で、一般的にはこれが得意な人が魔法使いとか魔術師と呼ばれることになる。

そして、その魔法使いが一番目立つのが開戦の瞬間である。

乱戦では唱えていられない長い詠唱を使うような広範囲に渡る魔法は、両軍がきっちり分かれている状況でしか使えないからだ。

次々に詠唱が終わり、【春の雪】から無数の魔法が放たれる。

やはり、それほど腕の立つ魔法使いが存在しないのか、火球や風の刃、氷の槍のような低級の魔法がほとんどだ。

「ばらつばらの低級スペルねえ。トワちゃんなら一人でもうちよつとましの魔法使つわよ」

背中まで届く長いストレートの金髪の女性が、呆れ顔で呟く。

【月齢の席】の二人目、フィリス・シャウラである。

目を引くのは、背中に広がる白い翼だろう。

【天人】の【白翼陣】に似ているが、それは違う。

その翼は、実際にフィリスの背中から生えているのだ。

すなわち、人ならざる姿の異端　奇形の少女。

「さあ、こつちも発動するわよ。防壁展開！」

フィリスが柄に埋め込まれた黄色の宝石を中心に美しい装飾の施された槍を掲げて命令を下す。

開戦の瞬間は読み合いだ。

攻撃魔法か、防御魔法か、弓で攻撃するか、それに対する防御か、あるいはあえて初手から乱戦に持ち込むか。

魔法の場合は、アドバンテージを取るために少しでも早く詠唱を始めるのがいいとされるために、その選択がさらに重要になる。

歴史を紐解けば、開戦直後に両軍が防御魔法を使った、などとい

う間の抜けた戦いを見つけられるだろう。

今回は、攻撃魔法と防御魔法という組み合わせだったようだ。

魔法使いたちが、一斉に防御の魔法を発動させる。

対現象障壁の魔法。

物理攻撃には全く効果がないが、【虚数原子】を利用した攻撃ならばどんな攻撃にもある程度対処できる万能防壁だ。

しかも、複数人が一つの魔法を発動する【共有魔法】と呼ばれるスタイルの魔法だ。

同じ魔法ならば、【虚数原子】を多く使えば使うほど強力になる。

だが、個人が一度に干涉できる【虚数原子】には限界があり、それを補うのがこの発動方法だ。

通常は他人の干涉した【虚数原子】には別の人間は干涉できないのだが、同じ詠唱で同じ魔法を使うのなら、詠唱に一手間加えるだけで、それを可能にできる。

この利点から、軍隊では効率のいい詠唱よりも、教科書通りの詠唱が喜ばれる場面が多々あったりする。

【グラスムーン】の前面に薄く輝く光の壁が発生し、【春の雪】の魔法を完全に防ぎ切る。

それを確認して、アキトは鞘から剣を抜き放った。



【ヤマ列島】で作られる、【倭刀】と呼ばれる片刃の武器だ。

「全軍、進めえ！」

二度目の詠唱の隙は与えない。

号令一下、【グラスムーン】の騎兵が突撃し、その後ろに歩兵が続く。

【春の雪】も応戦するが、兵の錬度がまるで違う。

戦線が瓦解し、【グラスムーン】の勝利が決まるまで、それほど時間は必要なかった。

……………

戦闘が終わり、開戦の前にアキトと話をした男が捕らえられて引き出された。

「……………殺せ」

忌々しそうな顔で、男が言う。

アキトは、その男に首を横に振ってみせた。

「一応同胞だ。なるべく殺したくはない」

「今のこの国では我らは生きられん。

生きるための我らの主張、聞き入れられぬなら同じことだ」

「そうか……だが個人的な意見は抜きにしても殺すわけにはいかない。」

君には色々と話してもらわなければならないことがあるからな。拠点や他の組織との繋がり、リーダーなら色々知っているだろう？？」

アキトがそう言った瞬間、男の口元が笑みの形に歪んだ。

一瞬の変化だったが、アキトはそれを見逃さなかった。

「何がおかしい？」

「いやなに、私をリーダーだと思っていることがな」

アキトに見られたからか、男は隠そうともしない笑みを浮かべた。

負けて捕らえられているくせに、勝ち誇ったような笑みだった。

だが、

「君はリーダーではないのか？」

アキトの言葉に、その笑みは凍りつくことになる。

「そうか。それなら、別働隊の方にいるのか」

「な……」

男の顔から笑みが消え、驚愕が浮かび上がる。

「なぜ……それを……」

「こつちにも情報網はある。あぁ、そつだ」

端的に答え、そして、思い出したように付け加えた。

「こちらも、団長と副団長は留守にしている。奇遇だな」

それを聞いて、男はこんどこそがつくりと頂垂れるのだった。

王都【ベルギーニア】に程近い森林地帯【シェールバルト】。

鬱蒼とした木々に遮られて地面まで光は届かず、森の中は昼間でも肌寒い。

だが、森の中の気温はあまりにも低かった。

間違いなく気温は零度を下回っているだろう。

いかに深森といえど、これは異常だ。

「っ！ 止まれ」

先頭の男 【春の雪】のリーダーの声で、本隊千五百を圍に、王都を目指していた【春の雪】の精鋭二十が停止する。

だが、既に遅かった。

「 氷晶の壁 立ち凍てつけ フロストウォール 氷壁屹立」

広範囲の【虚数原子】が氷を示す配列に書き換えられ、さらに気温が下がる。

針葉樹の葉が白く凍てついて文字通りの針のようになり、ダイヤモンドが舞った。

地面から突き出すように何十と言う氷の壁が現れ、【春の雪】の兵をその内側に閉じ込める。

閉じ込められた兵士たちが中から壁を叩くが、氷壁はびくともしない。

二十人で王都襲撃を成功させられるはずのメンバーが、一瞬で捕らえられる。

「これは……」

呆然とするリーダーの前に、木々の間から一人の少女が姿を見せる。

肩口までの深い紫色の髪、冷たい光を宿す赤い瞳。

服の肩には【グラスムーン】の旗印が縫い付けてある。

トワ・ミカゲ。

【月齡の席】の最後の一人にして副団長。

氷の魔法を得意とする、【グラスムーン】最強の魔術師。

「シエールバルトを抜ける別働隊。情報通り、ですね」

敵味方に名を轟かせる少女の姿に、リーダーが一步後ずさる。

どん、と背中が何かに触れた。

振り返ると、そこには部下を閉じ込めた氷の柱。

氷の中に歪む、自分を信じてついでにきた部下の姿に、失いかけていた闘志を取り戻す。

前を向き、腰に差した剣に手を伸ばし

トワの背に黒い羽が広がる。

開放された【虚数原子】が瞬時に世界を支配化に置き、

フロストウェッジ  
「氷牙之楔」

詠唱破棄。

術名そのもので【虚数原子】を望む形に配列する高等技術。

そのためには世界に満ちる【虚数原子】により深く干渉する必要があり、そのためには体内に保有する有限の【虚数原子】を詠唱す

るよりも多く消費するのだが、それを扱う余裕が、この少女にはある。

V字の氷が、リーダーの首と剣の柄を背後の氷に縫い止める。

用を成した羽が大気に溶けるように消える。

と、そこに、木々をがさがさと言わせながら、一人の青年が走ってきた。

銀色の髪に蒼い瞳の青年だ。

白い軍服を身に着け、左肩から背中にマントを羽織っている。

後ろから見れば、そのマントに【グラスムーン】の旗印が縫い取られているのが見えるだろう。

「ソウヤ。全員捕縛完了しました」

ソウヤ・ヒノカミ。

【セオニア王国】最強の兵団【グラスムーン】の創設者であり、団長でもある。

「そうか。遅れてすまない」

わずかな差しか無いのだが、実は【グラスムーン】の幹部の中で一番若いのがこのソウヤだ。

そのせいなのか、あまり偉ぶったところが無く、部下にも素直に

頭を下げる。

もっとも、二手に分かれて搜索していて、トワが偶然先に接敵しただけなのだから、別に謝ることではないのだが。

魔法の発動を感じて駆けつけたのだから、むしろ早い方だ。

「ソウヤ……ヒノカミ！」

憎しみに満ちた声で、リーダーがソウヤの名前を呼ぶ。

「春の雪の指導者か。降伏してもらおうぞ。

まあ、その状態ではそうするしかないだろうがな」

味方には腰の低いソウヤだが、敵にまでそれは適応されない。

【天人】と【魔人】の混血であるソウヤはそれだけで誰からも下に見られるのだ。

この上、態度でまで舐められるわけにはいかない。

「ふざけるな！ 俺は、まだやれる！」

ソウヤに叫び返し、リーダーは懐に手を突っ込み、一冊の本を取り出した。

「魔導書……」

トワが呟く。

一般に魔導書と呼ばれる本には二種類ある。

汎用性の高い詠唱を載せた、魔法の教科書としての魔導書と開くことでそのページに書かれた文字や図形によって魔法を発動する、武器としての魔導書だ。

この状況で教科書を取り出すことにはそう意味が無い。

ここで取り出すのなら、それは切り札　武器としての魔導書に他ならない。

詠唱破棄のトワの魔法よりも、ページを開く方が早かった。

ページに書かれていた魔法が発動する。

「が……ぐう……っ！」

呻き声と共に、リーダーの身体の変化が始まった。

全身の筋肉が拡張し、服が引きちぎれる。

上背も倍近くまでになり、一回りは大きい巨人のような姿へと変貌していく。

さらには、全身の皮膚が岩のように硬質化する。

重さも変わったのだろう、地響きを立てて、リーダーが一步踏み出す。

首を押さえていた氷の楔など、とうに砕け散ってしまっていた。



身体強化系の魔法だ。

魔法は世界を書き換える技術。それはすなわち、現実を捻じ曲げることだ。

自分の肉体を作り変えることも、不可能ではない。

原子構成体と虚数原子構成体が、同じ形をしているという特性を利用して、魂に干渉して形を作り変える技術 俗に言う錬金術として存在する。

故に、不可能ではない、が……

「ガアアッ！」

声帯すら変化してしまったのか、意味をなさない声を発して、リーダーが飛び出す。

ソウヤとトワが素早く飛び飛び退き、リーダーの一撃が大地を抉った。

尋常な膂力ではない。

「止める！ そんなことをしたらどうなるか、わかっているのか！」  
ソウヤが叫ぶ。

魔法は時間が経てば自然に消滅する。

それは、勝手に書き換えられた【虚数原子】の配列を、世界が元の形に復元するからだ。

だが、その魔法によって得られた結果までは復元されない。

もしそうだったなら、魔法による攻撃は全く無意味なものになってしまっだろう。

直接攻撃になる魔法ならそれでいいだろう。

だがそれが、自分の身体を作り変える効果だったら？

人が持ち得ないほどに強化された身体が受ける負荷、疲労。

それが、元の身体に降りかかる。

きちんと加減すれば、疲労や筋肉痛ですむ。

だが、限界を超えてしまえば、そこにあるのは、死だ。

「オオオオッ！」

凶器と化した腕を振りかざして、リーダーがソウヤに向かう。

威力も速さも、脅威。

だが、動きがわかりやす過ぎる。

ソウヤは、横薙ぎに振られた腕の下を潜り抜ける。

目標を外した腕は、背後にあった木々を何本もまとめてへし折る。

「トワ！」

「やりすぎです。あれでは、もう助かりません」

感情を見せず、淡々と答える氷の魔術師。

わかっていた。

トワに聞かずとも、あの強化がやり過ぎだというのはわかっていたことだ。

それでも、と思うのだ。

死は終わり。

生きてさえいれば、あの男だって、幸せになれたかもしれないのに。

「くそっ」

ソウヤは、腰に差した剣の柄を掴み、引き抜いた。

青い宝石のような石を中心に、柄、鐔、刀身のついた装飾剣だ。

とても実践に耐える強度があるようには見えない。

が、

正面から迫った、岩のような豪腕の一撃をその剣は難なく受けた。真っ向から受けたのではなく受け流したのだが、刀身に刃こぼれの一つもない。

ソウヤは、踏み込みながらリーダーの脇腹に切りつける。

火花を散らしながら、切っ先が肌を削った。

切り裂きながら駆け抜け、振り返る。

視界に広がる、灰色の巨腕。

一歩退いた眼前に、一撃が落ちて大地を沈ませる。

ソウヤは地面を抉った腕に足をかけ、持ち上げられるその力を利用して後方宙返りをうつ。

ばさりと、広がる白と黒。

右には【白翼陣】、左には【黒羽陣】。

「光の剣 十字の閃光 満ちて切り裂け！」

空中で詠唱し、着地。

剣を持たない左の手が、空中で十字を切る。

「クロスステイバイド  
十字裂光！」

放たれた十字の閃光が、リーダーの胴体を直撃。

その身を切り裂いて後方へと抜ける。

リーダーの身体がぐらりと揺らぎ、大地に倒れていく。

反王国組織【春の雪】、その最期だった。

しばらく後、ソウヤとトワは【シエールバルト】の外で、アキトとフィリスに率いられた本隊と合流した。

王都へ帰還しながら、お互いの情報を交換する。

「生きるための、当然の権利か」

「ああ。私利私欲ならともかく、この手の主張を掲げる相手とはやりにくい」

ソウヤの言葉に、アキトが苦い顔で返す。

「そうだな。その権利を求めているのは、俺たちも同じだ。だから、殺さずに止めてやりたかったんだ……」

やりきれない思いで、ソウヤは息を吐く。

【グラスムーン】が、【魔人】に対して悪条件の国政の元で働く

のは、ひとえにそのためだ。

功績を挙げ、【魔人】の存在を、国に、王に示そうと、そのために戦っている。

だが、そのために倒す敵は、同じ理想を求め、違う道を選んだ同胞たち。

今の情勢ではその選択をする理由も理解できるからこそ、達成感よりも後悔が胸に積もるのだった。

「リーダーともなれば、捕虜にしたところで処刑は免れなかっただろうがな。最近の王なら、特に」

「あの方を悪く言わないでくれ。悪い方では……ないんだ」

「自分を拾ってくれた人を信じたいという気持ちはわかるが……。いや、これは言っても仕方ないことか」

「……すまない」

「いや、気にするな」

アキトとソウヤ、二人を沈黙が包む。

「そこ！ なに暗い顔してんのよ」

そんな雰囲気もかけない、明るい声がかかった。

「フィリスさん。引つ張らないで下さい。馬から落ちます」

翼を広げて宙に浮いたフィリスが、トワを引っ張りながら近づいてきていた。

【白翼陣】にしても、【黒羽陣】にしても飛行目的のものではない。

その姿を見ただけでも、彼女が異質な存在なのだとわかる。

が、本人はそんな事を気にせず、暢気なものだ。

「勝ったんだからもっと嬉しそうな顔しなさいよね」

「春の雪が王都に到達した場合、住民に多くの被害が出たはずですよ。それが抑えられたことを喜んでもいいと思います」

相変わらずの無表情で言うからわかりにくいですが、それでもソウヤを慰めているらしい。

「そうよ。人ってどうしてこう良いことよりも悪いことにはっか目が行くのかしらね。」

顔上げて、前を見る！ そうじゃないと、幸せが逃げていくわよ」

「至言だな。もっとも、君は少しばかり楽天的に過ぎると思うが」

「何言ってるんのよ。悩み多き団長に無表情な副団長、その上、くそ真面目な同僚の三重苦なんだから、あたしがこれくらい明るくたって釣り合わないわよ」

「くそ真面目……」

「無表情……」

と呟く二人。

アキトはどう見ても不愉快そうだし、トワはその通り無表情だが、声の質から判断するに微妙に不満があるようだ。

「それじゃ、明るく帰るわよ。ベルギーニアに向けて、しゅっぱーっ！」

「おー」

「おー、と言っべきなのかな、これは」

元気よく宣言するフィリスに、棒読みでトワが唱和し、アキトが微妙に乗っかる。

悩みは多いが、部下には恵まれたようだ。

フィリスに引っ張られて馬を進めながら、ソウヤは笑みを浮かべるのだった。

次回＞第一話B「夜の深淵」



< 簡易キャラクター紹介 >

名前：ソウヤ・ヒノカミ（陽上 蒼耶）

年齢：17

髪の色：銀

瞳の色：蒼

種族：魔人と天人のハーフ

戦闘スタイル：魔法剣士

名前：トワ・ミカゲ（御影 永久）

年齢：18

髪の色：深紫

瞳の色：赤

種族：魔人

戦闘スタイル：魔術師

名前：アキト・コクヨウ（黒曜 暁人）

年齢：20

髪の色：黒

瞳の色：黒

種族：魔人

戦闘スタイル：剣士

名前：フィリス・シャウラ

年齢：18

髪の色：金

瞳の色：緑

種族：？

戦闘スタイル：槍使い

## 第一話A「硝子の月」（後書き）

話のテンポ悪っ。何と言う説明回。

多分、第三話くらいからは多少ましなテンポで進むかと思えます。

今回が一話A、次回が一話B。

これは、Aが王国サイド、Bが反乱軍サイドって意味です。  
基本的に、この二つが順番に進んでいきます。

昔の自分の文章が今に輪をかけて未熟で、読み返すのが恥ずかしい……。  
加筆修正と言うか、ほぼ新規に書き下ろす感じでリメイクしていきます。

内容は同じなのに容量が二倍になる不思議……。

第一話B「夜の深淵」(前書き)

修正) リィダのファミリーネームを書き忘れていたのを追加。

## 第一話 B 「夜の深淵」

【セオニア王国】の西の端。

【エリトア皇国】の国境付近に【パルティナ要塞】と呼ばれる建物が存在する。

元は【エリトア皇国】との戦争時の拠点となる地下要塞として作られたのだが、戦争で領地を取り合う間に何度も所有権が両国を行き来し、無秩序な増改築や相手に取られたときのための罾の設置を繰り返した結果、お互いに全く構造を把握できない迷宮になってしまった。

四年前の【エリトア皇国】の大敗で、今は【セオニア王国】が所有しているのだが、付近に新しく【ノクトワール要塞】が建設されたこともあり、現在は放置されている。

今はモンスター　この世界でモンスターとは人以外の生物全般を広く指す言葉だ　が唯一の住人ということになっているが、その実、この地下迷宮には、王国にとってモンスター以上に厄介な者たちが住み着いていた。

未だ表舞台にはその姿を見せていないが、この後に最大の反王国組織となる【アビスナイト】。

この地下要塞は、彼らが身を潜める拠点なのだった。

セオニア王国戦記  
第一話B「夜の深淵」

【パルティナ要塞】地下八階。

武器や食料の貯蔵庫を除くと、この要塞の最下層にあたる階層だ。

その階に存在する一室。

人が十人も入れれば一杯になりそうな部屋で、三人の男と二人の女が卓についていた。

その中の一人、【アビスナイト】を率いる黒髪紅瞳の青年、コウジ・ヤコウが口を開く。

「その情報、間違いないのか？」

「ええ。確かな筋から入手した情報ですよ」

そう答えたのは、【アビスナイト】を初めとして様々な反王国組織に情報売っている情報屋、リィダ・ポークス。

いつも目深にフードをかぶっていて、その素顔を見たものは一人もない。

声から男だろうと推測できる以外は、全く正体不明の男である。

ただ、もって来る情報は確かで、王国で高い地位にある貴族がこっそりと協力しているのではないかと見られていた。

「三日後、と言っても決定されたのは二日前ですからもう明日ですが、王国軍がこの遺跡にやってきます。

数は約五百。パーティナ再利用のための偵察というのが名目ですね」

「多すぎるな。偵察だけなら、モンスターの討伐を含めても二百もいれば十分なはずだ」

と、金髪を長く伸ばして首の後ろで一つにまとめている少女が口を挟む。

彼女の名はレイナディア・アルナスル、通称レイ。

背中には赤く染まった一對の翼という、異端の姿を持つ者だ。

「ん？ どういうことだそりゃ？」

そう言って首を捻るのは、シン・トキミネ。

二つの斧を柄の部分でくっつけたような、上下に刃のある巨大な斧を背負っている【魔人】の男だ。

黒髪は適当な感じに伸ばされていて、うざったそうにかき上げた前髪の下で左目は常に閉じられている。

「三人横に並んだらつつかえるような通路しかない要塞にそんなに連れてきたって邪魔なだけだろう?」

「あー、そっぴや最初に入ったとき戦いにくかったな」

シンがうんうんと頷く。

「お前がなんも考えずに斧を振り回したせいで、通路を掘り直す手間が増えたんだよな……」

「そんなこともあったな。すげえだろ?」

「威張るところじゃねえよ。っと、話が脱線してるな」

コウジ話の軌道を修正する。

「で、実際どうなんだ? リイダ」

「そうですね。偵察目的なのは正しいと思いますが、知りたいのは要塞よりも、その中にいるものの方でしょうね。モンスターだけならばよし、反乱軍が潜んでいればそれもよしというところでしょう。正規軍五百を相手取れる反乱軍となると、春の雪、ヒーストクロー獣王の爪、魔人解放戦団くらいのものですから」

「そっぴか……」

コウジは目を閉じてしばし黙考する。

そして、再び目を開いたとき、その瞳には炎にも似た獰猛な光が



宿っていた。

「それじゃ、教えてやらないとな。五百で足りない反乱軍がここにもいるってことを。」

シン、レイ、全軍に戦闘準備をさせる」

「お、やっと戦えんのか。待ちくたびれたぜ」

「わかった。だが、戦うと言っても、どう戦う？ 地の利はこちらにあるが、籠城するか？」

「いや、撃つて出る。折角勝利しても、それが必死に護って追い払いました、じゃ格好つかないだろ」

「ふっ、そうだな。了解した」

「要は暴れられんذار？ 任しとけよ」

返事をして二人が部屋を出て行く。

「では、私もこれで、新しい情報を探しに行きます」

「わかった。頼む」

「ええ。任せてください」

リイダも部屋を出て行き、部屋にはコウジと、会議で一度も口を出さず、コウジの後ろに立っていた少女だけが残る。

カヤ・ツキシロ。

肩上までの薄い茶髪に赤茶色の瞳。

この反乱軍には珍しい、【人間】の少女だ。

「カヤ、いよいよだ。戦いが始まるぞ」

「はい。わかっています」

カヤが頷く。

「相手には人間もいる。戦うのが辛いんだったら」

「ご主人様。私は、ご主人様と一緒に戦います」

コウジの言葉を、きっぱりとカヤが遮る。

「戦ってくれるか？ 俺と共に」

確認するように問うコウジ。

だが、そんなことをしなくても、相手の心はわかっていた。

ある魔法の影響で、コウジとカヤの精神は、一端が繋がった状態にある。

そのせいで、完全にとまではいかないが、お互いの心や感情が伝わってしまうのだ。

コウジがカヤを必要としていて、カヤはコウジと共に戦うことを

望んでいる。

そして、その理由となる感情も、また。

「当然です。カヤは、ご主人様の奴隷ですから」

「戦いの準備をしてきます」と告げて、カヤが部屋を出て行く。

「奴隷、か」

一人残ったコウジは、ぽつりと呟く。

ズキリと痛んだのは、いったい、どちらの胸だったのだろうか。

翌日、正午頃。

【ノクトワール要塞】から派遣された約五百の王国軍が【パルティナ要塞】の正面に陣を構えた。

陣営にはためく旗には大木と盾の旗印。

セオニア王国軍第二兵团【ルートシールド】だ。

かつては【パルティナ要塞】を、今は【ノクトワール要塞】を中心に【エリトア皇国】と接する西の国境沿いに展開する軍で、常備軍では最大である約二万の兵力を持つ。

この他には、王都に常駐する第一兵団【インペリアルフォース】一万五千、諜報や特殊仕事を専門に行う第四兵団【シャドウ】五千。それと、少数で何でも屋的な働きをさせられている第五兵団【グラスムーン】二千。

この約四万の軍が【セオニア王国】の保有する常備軍だ。

少ないように思うかもしれないが、国の総人口の実に一割を占めていて、実際はかなり軍備に傾いている。

もつとも、平時は訓練の無いときは警察のような役割を担ったり普通に農業をしていたりもするのだが。

ここに名前の上がらなかった第三兵団は、有事の際に領地を持つ貴族が率いる私兵や、民間人から徴兵した兵によって構成される兵団で、名前はそつと変わる。

規模もまちまちなのだが、十二年前の【エリトア皇国】との大戦の際には、約十万を動員したと記録に残っている。

【ルートシールド】の陣営に張られた天幕。

そこで、この偵察部隊を率いる部隊長が部下たちと最後の打ち合わせを行っていた。

そこに、伝令役の兵士が入ってくる。

「隊長、準備完了しました」

「そうか、わかった。点火の準備もしておいてくれ」

「はっ」

伝令の兵士が天幕を出て行く。

今回の【ルートシールド】の任務は、【パルティナ要塞】の偵察。

だが、モンスターが住み着いていると言われる迷宮に迂闊に入るのは危険が伴う。

その上、この要塞は守りを重視して作られたために、攻める側に不利な仕掛けが大量に仕掛けられているのだ。

そのいう事情を踏まえて部隊長の選んだ策は、要塞前で木を燃やし、その煙で地下要塞を燻してしまおうというものだった。

さらに、出入り口の外に弓兵を配置し、出てきたところで殲滅する。そういう作戦だ。

ちなみにこの策、何度か前の【エリトア皇国】との戦いで当時の【ルートシールド】が大打撃を受けた戦法のパクリである。

「さて、何が出てくることか……」

「何って、モンスターじゃないんですか？」

部隊長が何となく呟くと、隣にいたまだ若い部下がそう答えた。

隣を見ると、きよとんとした視線が返ってくる。

本気でそう思っているようだ。

自分もこれくらい単純に考えられたなら、部隊長なんか選ばれずすんだらろうかと思う。

上からはつきりとは言われていないが、この作戦の目的は、おそらくここを根城にしているだろう反乱軍だ。

この男は【天人】だったが、数年前までは同じように生活していた【魔人】を一方的に迫害するような今の国には疑問を持っているのだった。

軍を探してももういないが、共に戦場を駆けた【魔人】の戦友は何人もいるのだから。

「それにしても、何で調査とモンスター退治くらいで俺たちが出てこないといけないんですかね。」

ルートシールドの仕事じゃないですよ、こんなの」

「まあそう言うな」

だからただの調査じゃないんだ、と言ってやりたいのを抑えて、部下に返事をする。

「神速戦役以来、エリトアも大人しいもんだ。任務があるだけありがたいと思うんだな」

神速戦役。

四年前の【エリトリア王国】との戦争の呼び名だ。

【エリトリア王国】は何らかの方法（現在でも正体不明）で皇王サ  
ーキア・イル・エリトリア自ら率いる三万もの軍勢を、一瞬にして【  
ベルギーニア】のすぐ側に展開。

国境監視をしていた【ルートシールド】は、その侵攻を察知する  
ことさえできなかった。

当然、第三兵団の召集などできているはずもなく、動かせるのは  
【インペリアルフォース】のみだった。

さらに、当時はある事件で国内もごたつについて、【セオニア王  
国】にとって絶望的な状況だった。

はっきり言って、敵味方の全員が【エリトリア王国】の勝利を確信  
していた。

が、現状を見ればわかるように、そうはならなかった。

【エリトリア王国】軍は、たった一撃で壊滅的な打撃を受け、敗走  
軍の展開から一時間も経たないうちに戦争が終結してしまったの  
だ。

そして、この【エリトリア王国】の軍展開と、決着までの時間のあ  
まりの短さから、神速戦役と呼ばれることになったのである。

「グラスムーンって言うか、ヒノカミ団長の初陣でしたよね。」

俺、当時はまだ王都で訓練兵してたんですけど、あれはびびりましたよ」

「開戦時の魔法合戦は確かに一軍壊滅させられる威力の魔法が飛び交うが、それで決着がつくことはまず無いからな……」

「お互いわかってますからねえ。ほんとに、どうやって防御を抜いたんだか。」

「てか、グラスムーンのおかげで国が助かったのに、何で国政転換したんですかね？」

「俺は戦いがあったことも知らずに国境警備してたからな。中央で何があったかは知らんよ。」

「ただまあ、王妃様とアイシア様のことが関係あるんだろうな」

「ですよねえ。俺みたいにな下っ端にはわからない世界ですよ」

「そんなことを話していると、先ほどの伝令が戻ってくる。」

「隊長」

「お、準備が終わったか？」

「はい、それもあるんですけど……その、要塞の入り口で少女を保護しまして」

「何だつて？」

「このタイミングで、保護とは、かなり不審だ。」



「反乱軍が降伏してきたのではないのか？」

「いえ、本人は反乱軍に捕まっていたのだが、急に騒がしくなった隙を突いて逃げてきたと」

「怪しいな。もっと詳しく話は聞けなかったのか？」

「それがその、気が立っているのか、白翼陣……いや、赤かったけど……一応翼……？」

「報告は簡潔にしないか」

困惑した表情で呟く伝令を、部隊長が促す。

「はい、その、白翼陣を展開したままこちらを威嚇し続けており、一番偉い人に護って欲しいと」

「天人か……」

反乱軍ならば天人に恨みを持っている人間もいるだろう。

それなら捕まっていたと言つのも頷ける。

「いいだろう、連れて来い」

「はっ」

伝令の兵士は天幕を出て行き、すぐに一人の少女を伴って戻ってきた。

少女は、薄汚れた大きな布で体を覆っていて、その下を窺うことはできないが、報告にあった通り、背中に翼を広げている。

(赤い翼……？　こんな白翼陣も存在するのか？)

少し疑問を感じながら、伝令の兵士に小声で聞く。

「身体検査は？」

「近くにいた救護班の女性にさせましたが、武器になるものは持っていないと」

「救護班？」

「その、あの布の下、ほとんど裸のような格好で……」

「あ、ああ、そうか……」

頷きながら、つい少女に視線を送ってしまう。

と、それに気がついた少女が不思議そうな目で見返してきた。

部隊長は何となく気まずい思いで目を逸らし、

「どっかに軍服の予備が余っていただろう。持ってきてくれ」

と、部下に指示を出した。

悪い人ではないのだ、と少女　レイナディアは思う。

だが、止まるわけにはいかない。

善人だろうが悪人だろうが 敵だ。

「さて、俺がこの部隊を預かってる者だ。君の名前は？」

部隊長が声をかけてくる。

「い」

「え？」

レイナディアは何かを呟いたが、小声過ぎて聞き取れない。

「ごめん、もう一度言ってくれろ？」

聞き取るために、部隊長が体を近づける。

レイナディアは、自分の翼に手を伸ばしながら、

「すまない」

と呟いた。

手が翼に滑り込む。

ありえない、と部隊長は思った。

【白翼陣】は【虚数原子】開放に伴う一種の発光現象だ。

目には見えても、触れない。

それなら、触れることのできるこの翼は、【白翼陣】などではなく、もっと別の

考えられたのはそこまでだった。

レイナディアが翼に忍ばせておいた短剣で、部隊長の喉を貫いていた。

どさりと倒れた体のしたに、血溜まりが広がっていく。

「お前、敵か！」

すぐに部下が身構えるが、彼らの目の前でレイナディアは翼を広げて飛び立つ。

天幕の天井を破って飛び出し、急な動きではだけかけていたボロボロを体に巻きなおす。

「全く……作戦とは言え、どうして私がこんな格好を……」

レイナディアは空を舞い、【パーティナ要塞】の地上部の上に降り立った。

そこに隠しておいた、自分の武器を取り出す。

美しい装飾の施された、純白の弓だ。

一緒に置いておいた一本の矢を、弓に番える。

きりきりと引き絞り、

「さあ、戦いの狼煙　いや、鎗矢かぶらやを放とうか」

射る。

矢が鋭い音を発しながら、高く飛ぶ。

そしてその音は、地下に潜むものたちにも届いていた。

.....

「レイがうまくやったみたいだな。俺たちも行くぜ」

地下の一室で、コウジが言った。

とても地下だとは思えないほど広い部屋に、武装した反乱軍の兵たちが所狭しとひしめきあっている。

いやむしろ、一室にぎゅうぎゅう詰めに押し込まれているといった風情だ。

天井は恐ろしく高く、コウジの声がよく響いた。

「作戦開始！」

コウジの命令が下され、魔術師たちが詠唱を始める。

声を合わせた、共有魔法。

そして、一人だけ違う詠唱を、コウジの隣でカヤが行う。

「大地に眠る赤き息吹 深きより出で その力を見せよ」

共有魔法が、高い天井を吹き飛した。

その上から、まばゆい太陽の光が差し込んでくる。

「焦土の焰 山より高きに至る勢いを 噴炎爆火！」  
ヴォルカノン

カヤが詠唱を括り、魔法を放つ。

次の瞬間、コウジたちの立つ床が、地震のように揺れ始め、天井の穴へと浮き上がる。

カヤが魔法で床の下から炎を吹き上げ、その力で床を押し上げて  
いるのだ。

無くなった天井を抜け、太陽の光の下へと出る。

その場所は、【ルートシールド】の陣営の真横。

僅かに遅れて、陣営を挟んだ反対側にも同じように反乱軍が現れる。

その数は一方に約千五百、合計で約三千人にも上る。

【ルートシールド】の対応は鈍い。

要塞偵察のはずで、反乱軍がいるなど、聞いていないのだ。

指示を仰ごうにも、指揮官は既に殺されてしまっている。

浮き足立った敵兵を見ながら、コウジは剣を引き抜いた。

黒い刃に葉脈のように赤い線の走った刀身を持つ両刃の剣だ。

柄には繊細な装飾が施され、鍔元に赤い宝玉が埋め込まれている。

剣を天に掲げ、コウジが叫ぶ。

「全軍、攻撃開始！ アビスナイトの名前を、刻み付けてやれ！」

号令の下、【アビスナイト】の軍勢が一斉に王国軍を挟撃する。

策など弄さずとも元々六倍もの兵力差があったのだ。

【ルートシールド】は【アビスナイト】に喰らい尽くされ、後にはほぼ全滅という結果だけが残った。

赤き月の旗を掲げた反乱軍の一報が【ベルジーニア】に届けられるのは、これから五日後のことになる。

その夜。

コウジは、被害の確認などの案件を片付け、ようやく【パルティナ要塞】の自室へと戻ってきた。

「疲れた……」

ベッドの上に倒れこむ。

その疲れは、肉体的なものと言うよりも精神的なものだ。

幼い自分を護ってくれていた両親を殺された後、コウジにとって生きることは戦いだっただ。

シンと共に師と呼べる人の下で過ごし、だが、その師も喪った。

シンと二人、生きられる場所を探して【セオニア王国】に辿りつき、一時の安らぎを得た。

だが、それも最早過去。

今再び、生きるための戦いに足を踏み入れた。

「手を汚すのには、慣れてるんだがな……」

コウジは、仰向けになって天井に手をかざした。

自分の手で命を奪うのには慣れてる。

だが、他人に命じて殺させるのは、自分の指揮下で誰かが死んでいくのは、別の重みがあった。



そのままぼんやりと天井を見上げてみると、遠慮がちに扉が叩かれた。

誰が来たのか、ノックのしかたですぐにわかる。

「カヤか。入れよ」

「失礼します」

声をかけると、おずおずとカヤが入ってきた。

「すみません。お休みでしたか？」

「いや、転がってただけだ。何かあったのか？」

コウジはベッドから起き上がりながら聞く。

「はい……それが……」

言いにくそうに口ごもるカヤ。

繋がっている心が、躊躇いや不安を伝えてきた。

「どうしたんだ？」

「先ほど、クレアさんが戻られました」

「クレアが？」

クレアは、【アビスナイト】の仲間で、主要メンバーの一人だ。

元暗殺者なのだが、雇い主に捨てられたところをコウジに拾われたという過去を持つ。」

その暗殺者時代の技量で、クレアには諜報活動のようなことをさせている。

「あいつは春の雪に紛れ込ませてたはずだろ？」

「それが……全滅だそうです」

「なっ」

コウジが絶句する。

春の雪は反王国組織の中で最大規模の組織だ。

だからこそ、【アビスナイト】が表に出たらすぐに協力関係を作るようにクレアを潜り込ませておいていたのだ。

それが、全滅した。

「本隊を囷にした少数精鋭による王都襲撃を計画し、それをグラスムーンに叩かれたそうです。」

中枢メンバーを一度に失いましたから、逃げた兵も再起を図るのは難しいかと」

「グラスムーン……っ、ソウヤ・ヒノカミかつ」

忌々しくその名を吐き捨てる。

コウジと同じ、【魔人】と【天人】のハーフ。

限りなく近いはずなのに、正反対の理念を持つ、王国の将。

「やっぱり、あいつが最大の障害になるみたいだな……。少し、つづいてみるか」

コウジはそこで言葉を切り、天井を見上げて言う。

「なあ、クレア？」

次回>第二話A「王国の支配者」

<簡易キャラクター紹介>

名前：コウジ・ヤコウ（夜降 紅司）

年齢：18

髪の色：漆黒

瞳の色：紅

種族：天人と魔人のハーフ

戦闘スタイル：魔法剣士

名前：カヤ・ツキシロ（月代 華夜）

年齢：16

髪の色：薄茶

瞳の色：赤茶

種族：人間

戦闘スタイル：魔術師

名前：シン・トキミネ（時峰 慎）

年齢：18

髪の色：黒

瞳の色：琥珀

種族：魔人

戦闘スタイル：斧使い

名前：レイナディア・アルナスル

年齢：19

髪の色：金

瞳の色：青

種族：？

戦闘スタイル：弓使い

名前：クレア

年齢：？

髪の色：？

瞳の色：？

種族：？

戦闘スタイル：暗殺術

名前：リイダ・ポークス

年齢：？

髪の色：？

瞳の色：？

種族：？

戦闘スタイル：？

## 第一話B「夜の深淵」（後書き）

キャラ名の話ですが、前に書いていたときに、魔人（当時は魔族）は漢字表記って縛りがあったので、こういう名前なんですネ。

大勢いて違和感を感じるかもしれないですが、そこは受け入れていただければありがたいです。

リメイクにあたって、多少固有名詞やキャラの性格が変わっています。

もしも、突然謎の地名が出てきたり、明らかにキャラの口調がおかしいときは古いのが混じっているので、指摘してください。

## 第二話A「王国の支配者」

【セオニア王国】現国王、オディフィル・セオニア。

建国から五百年以上の歴史を持つ王国を背負うこの王は、一体、どのような人物なのだろうか。

その答えを得るために、少しばかり王国の歴史を振り返るとしよう。

オディフィルが王になったのは、今から十六年前。

当時、王は三十歳だった。

在位中に全ての戦争で敗北し、王国の領土の五分の一近くを【エリトア皇国】に奪われた【敗戦王】ジーデイス・セオニアの戦死後、オディフィルの兄であるメイゾン・セオニアが王位を継ぐのだが、メイゾンは即位からわずか二ヶ月後に起こった【エリトア皇国】との戦いで戦死してしまふ。

そして、戦場で王冠を譲り受け、国王オディフィル・セオニアが誕生することとなった。

オディフィルは即位するなり戦場を部下に任せて王都に撤退し、国民に失望されるが、国民はその考えが間違いであったことをすぐに悟ることとなる。

王都に戻ったオディフィルは瞬時に国の体制を作り変え始めた。

政治と宗教の分離を宣言し、王城に隣接する大教会を政教癒着の象徴であるとして閉鎖した。

その上で、【魔人】を迫害し【天人】を優遇するあらゆる法を撤廃し、三族共存宣言を発表。

これによって、国内に大きな領地と豊かな資産を持つが、ことあるごとに国に異議を唱え続けていたコクヨウ家を初めとした国内の【魔人】や、国外から流れ込む【魔人】の支持を得、五日で三万の兵を得たと言われる。

これを増援として戦線に投入し、皇国軍を粉砕。

一戦で父が奪われた全ての領土を取り戻した。

これだけ見ると、オディフィルが【魔人】を戦力として利用したように見える。

実際、戦力を求めてという一面があつたことは確かだろう。

だが彼は、【魔人】を利用するだけにはしなかった。

それは、次に起きた事件を見ればわかるだろう。

【エリトア皇国】を退けた直後、【サンク・エルス聖教国】がオディフィル王に三族共存宣言の撤廃を要求してきたのだ。

だが、オディフィル王は『自らの民を貶める王などありえない』と、この要求をきっぱりと退けた。



これを受け、【サンク・エルス聖教国】は【セオニア王国】は【魔人】によって支配されたとし、神の代行としての戦争 聖伐を目論むのだが、【サンク・エルス聖教国】から【セオニア王国】に攻め入るには陸路も海路もエリトリア皇国領を通る必要があった（陸路を大回りしても、やはり【魔人】を保護するハルバニア王国が存在する）。

貪欲に領土拡張を狙い、また、オルトウクス神話を聖典とする邪教（アード教曰く）を信仰する【エリトリア皇国】は【サンク・エルス聖教国】にとっても強大な敵国であり、不用意に刺激することを恐れた【サンク・エルス聖教国】は聖伐を諦めることになる。

その代わりに、国内に存在するアード教の天兵（アード教徒の神官兵）に命じて内乱を起こさせた。

後に【ベルギーニア狂信事変】と呼ばれるこの事件で、王都のおよそ三割が壊滅、多数の死者を出した。

内乱自体はオディフィル王率いる【インペリアルフォース】によって鎮圧され、皮肉にもその後の復興を通じて【魔人】との融和が進むこととなる。

これによって、【セオニア王国】の魔人融和路線は国内外に響き渡り、受け入れられない者は出国し、同調する者が入国した。

こうして、現在の【セオニア王国】が完成したのだ。

ちなみに、こういう経緯で集まった国民であるため、【魔人】でなくとも現在の王の方針には疑問を持つものが多い。

しかし、ここに一つの疑問が残る。

【サンク・エルス聖教国】の行った三族共存宣言の撤廃要求は明らかな内政干渉であり、【サンク・エルス聖教国】はそんな権限を持たない（持たなくても、アード教徒の多い国では為政者にも教徒が多く、勝手に聖教国寄りの政治が行われている）。

それを突っぱねられたからと言って、聖伐の発動、まして、内乱を起こさせるなどあまりにも乱暴だ。

当然、そこには理由が存在した。

【サンク・エルス聖教国】は閉鎖された大教会に、どうしても回収したいものが存在したのだ。

それが、【サンク・エルス聖教国】の呼び方という【神器】。

もっと一般的には【アルカナ】と呼ばれる武具である。

【アルカナ】は、自らの意志を持ち、資格のないものが使えば命を奪うが、所有者に選んだものには魔法法則の例外として存在する強大な力を与える。

【セオニア王国】には【アルカナ】が眠る遺跡がいくつか存在しており、秘密裏に回収していた【アルカナ】を内乱に乗じて教会から持ち出し、【サンク・エルス聖教国】へと運ぼうとしたのだ。

しかし、その目論見は結局、達成されることはなかった。

閑話休題。

とにかく、オディフィルは大きな力を持つ【サンク・エルス聖教国】を相手取っても、三族共存を撤回はしなかった。

彼の一生を振り返ったある歴史家は著書にこう残す。

『オディフィル・セオニアという人間は情に篤く調和を愛し、また、それに相反する冷酷さと苛烈さを持っていた。端的に言って、身内に優しく、敵に厳しいのだ。』

と。

【魔人】に関する急な方針転換は、彼にとっての身内と敵が入れ替わったからだ。

その原因となったのは、一体何だったのだろうか……

## セオニア王国戦記

### 第二話A「王国の支配者」

王都【ベルジーニア】。

円形の城壁に囲まれた、人口五万人を数える国内最大の都市である。

中央には王城がそびえ立ち、都市のどこからでもその威容を見ることが出来る。

東西南北の四箇所に門が存在し、そこから王城へと伸びた大通りに沿うように商店が並ぶ。

大通りから一歩踏み込めば細かな路地の通った住宅街に入ることが出来るだろう。

円周の内側に行くほど地位の高い、あるいは金持ちが住むように人々が住んでいる都市だ。

「ソウヤ！」

【春の雪】の残党が起こした小規模な騒ぎをトワと共に鎮圧したソウヤが王城に帰還すると、待ち構えていたようにアキトが走ってきた。

「アキト。わざわざ出迎えてくれたのか？」

「何を暢気なことを言っている。陛下がお呼びだ、すぐに王の間に行け」

「陛下が？」

普段はソウヤのことなど見たくないといわんばかりに避けている王が呼ぶとは、珍しい。

命令すら配下が伝えに来るほどだというのに、呼ばれるとは。

こういうときは、たいていよくない事が面倒なことが起きているのだが。

「何かあったのか？」

ソウヤが聞くと、アキトは一言だけ答えた。

「新しい反乱軍の知らせが届いたらしい」

……

王城の最上階。

きらびやかな装飾のなされた壁や柱に囲まれた一室が玉座の存在する部屋、通称、王の間だ。

部屋とはいっても、小さなパーティーくらいなら簡単に開けそうな広さがある。

部屋の奥の壁に大きな王国の国旗が掲げられ、その下の玉座に、黒い杖を持った男が座っていた。

頭に王冠を戴き、豊かな口髭を蓄えた男だ。

自身も戦場に立つ体は鍛えられており、優雅なマントの下でもその存在を見て取ることができる。

彼こそ、この王国の王、オディフィル・セオニアだ。

その傍らに控えているのが王族を示す額のティアラでわかる通り、オディフィルの娘であるアリエル・セオニアだ。

背中に届く栗色の髪は細い金鎖で飾られている。

まだ若いが、既に国政に携わっている優秀な少女だ。

彼女は、父親とは違って最近の国政転換には反対の立場を明言している。

にも関わらずアリエルが何ら処分を受けていないのは、オディフィルがたった一人の娘に厳しくあたれないからだろう。

そこから三段の階段があり、その下の少し広い部分に二人の男が立っている。

この二人は、宰相と呼ばれる地位にある。

アキトの兄であるタクト・コクヨウも四年前まではこの地位にいたのだが、今は降格させられてしまった。

そして、そこから更に数段の階段を下りた所が、今ソウヤたちの跪いている場所だった。

召集されているのは、ソウヤの他に【インペリアルフォース】【シヤドウ】の各団長、それに、十一名の国政議会議員だった。

議員の中には議員唯一の【魔人】であるタクトの姿がある。

国政議会議員は、読んで字の如く国政を司る機関の構成員だ。

裁判や軍事行動にも口を出すことができるが、基本的には立法と行政を行っている。

立法に関しては、十一名の過半数の賛成を得た法案が、枢機卿に王女アリエルを加えた三人で議論され、そこで多数決を通った法案が、最終的な王の裁定を受けることになる。

命令系統はこの逆の順であるが、王や宰相は議会を通さなくとも命令を下す権限を持っている。

さらに、王は独自に法を作る権利を有し、その法については、宰相と議員の全会一致でしか廃案とすることはできない。

現状、議員は現政策に反対派と賛成派が半々くらいだが、国王の不興を買いたくないという保守派がいるために賛成派が多数となっている。

宰相は賛成派と反対派が一人ずつ。

アリエルが反対派なので、下から【魔人】に不利な法案が上がっても通らないが、王が決めた法には逆らえない。

ただ、【魔人】の絡まない案件については通常通りに機能している。

ちなみに、各兵団の命令系統はこれとは別で、団長が自分の指揮する兵団の兵への命令権を持ち、各団長には王のみが命令を下すこ

とができる。

要するに、王がほぼ絶対の権力を持っているのだった。

「揃ったか」

階段の下に揃った面々を見下ろしながら、オディフィルが口を開く。

「五日前、パーティナ要塞跡でルートシールドの一部隊が反乱軍と戦闘、ほぼ壊滅という知らせが届いた。報告によれば、その規模は約三千」

広間に驚きの気配が満ちた。

三千という数は、確認されている組織の中では最大級だ。

それだけの規模の組織が、全く見つかりもしないで今まで隠れていたとは。

むしろ、見つからなかったからそこまでの力を蓄えられたのかもしれない。

だが、それを口に出すものはいない。

王の間で発言が許されるのは、王の許可があった時だけだ。

「ギイド。何か揃んでおるか？」

「はっ」



王に名指しされたのが、手の先、足の先まで完全に覆ってしまうローブを着ている男、ギイド・カスター。

第四兵団【シャドウ】の団長である。

戦場に出ることは珍しく、彼らの戦場は専ら情報戦である。

ギイドは、王ですら把握していない【シャドウ】の広い情報網を全て把握している唯一の存在だ。

古参の将だが、今の王の方針には疑問があるのか、こっそりとソウヤに情報を教えて手助けしてくれる。

【春の雪】との戦いで、別働隊の存在を教えてくれたのもこの男だ。

「組織の名はアビスナイト。率いているのは、コウジ・ヤコウという名の男です。戦場を見た者によると、『白翼陣と黒羽陣の両方を持っていた』と」

「ほう……。魔人との混ざり物か。何者にもなれぬでこそないと  
いうわけだな」

お前と同じように、と言うようにオディフィルの視線がソウヤに向く。

ソウヤは無言のまま特に反応を見せない。

「ぶん、まあよい」

オディフィルは面白くなさそうに視線を正面に戻す。

「三千の反乱軍。現状ではたかが、と言える数だが、このまま勢い付かせると厄介なことにもなりかねん。

これを速やかに討伐しなければならぬが、三千に対応する数をルートシールドから出させるとなると、エリトアへの備えが危うくなる。

よって、ルートシールドにベルジーニアからの増援を加えた上で、アビスナイトを叩く。

名乗り出るものはいるか？」

「私が、向かいます」

と、すぐさま応えたのは、ソウヤだ。

【グラスムーン】を全て動員しても約二千だが、【ルートシールド】からも軍を出してもらえらるなら数で上回って戦えるだろう。

何も戦いたくなどはないが、相手は自分と同じ存在。

もしかすると説得もできるのではないかと、そんな考えもあった。

「ヒノカミ、お前が行くか？」

「はっ」

返答するソウヤを見て、オディフィルは暗く笑った。

「ならば、ヒノカミ。グラスムーンを率いて出陣し、ルートシールド

ドと合流。その後、エルトーナ自治区の魔人を殲滅せよ」

「な、エルトーナを、ですか？」

思わぬ命令に、ソウヤは聞き返さずにはいらなかった。

【エルトーナ魔人自治区】は【パルティナ要塞】の近くに位置する【魔人自治区】だ。

「なぜ、そのようなことを……」

「表向きに言うなら、アビスナイトに加わる可能性が一番高いからだな。危険の芽は早いうちにつみ取らねばならん」

「表向き、とは？」

つまり裏があるということだ。ソウヤは思わず問い返した。

「一から十まで教えられねばわからんのか？　少しは頭を使え。さあ、早く返事をしないか」

頭を使う時間を与えず、たたみかけるように言う。

ソウヤは、

「……その命令は　聞けません」

逡巡の後、そう答えた。

「ほう、なぜだ？　今まで散々に同胞を殺しておいて、今更何を躊

躊躇う？」「

「魔人も、同じ国の仲間です。何の罪も犯していない者を、殲滅などできません」

「何の罪も犯していない、か。くくっ」

オディフィルがせせら笑う。

「何が罪かと言えば、存在が罪なのだよ、ヒノカミ。

ああ、そう言えば、お前の周りにもたくさんいるのだったな。エルトーナよりも先に、殺しておくか？」

「陛下、あなたは」

殺すと言ったのか？

自分を取り巻く、皆を。

共に戦う仲間を、ついてきてくれている部下を。

自分のことなどどう言われようとも構わない。

だが、仲間を傷つけると言つのなら　それは、許せない。

陛下、あなたは どうして、そうなってしまったのですか！？

ソウヤは激情に任せて立ち上がる。

オディフィルを害するつもりなどなかったが、この言葉をぶつけ

るくらいは

「ヒノカミ団長！ 控えぬか！」

鋭く、アリエルから叱責の声が飛んだ。

ソウヤは自分に言葉を飛ばした王女を見遣る。

言葉こそ厳しかったが、彼女の表情はいつそ悲しげだった。

それが、ソウヤに冷静さを取り戻させた。

「……申し訳ありません」

再び跪き、非礼を詫びる。

「謝罪は聞かん、我が意に反したことを身を持って後悔せよ」

オデイフィルはそう言って持っていた黒い杖を掲げた。

不思議な光沢のある木でできた杖で、先端は人の手のような形になっている。

その手に握られるかたちの赤い宝珠が、暗く輝く。

「お父様！ お止め下さい！」

アリエルの悲鳴のような声。

だが、オデイフィルはその制止に耳を貸すこともなく、ある言葉

を口にする。

【アルカナ】に選ばれたものだけが知る、能力解放の鍵詞キーワードを。

「我が意に背きし意志を抉りて侵せ フォルメレディクト」

赤い宝珠が一層輝きを増し、そして、その効果は一瞬の後に発揮される。

「つ、ぐ、ぐああああああ！？」

ソウヤを襲う強烈な頭痛。

正確には頭が痛いのではないのだが、形容するならばそれが最も近い表現になる。

所有者が望むままに、対象者に時には死に至るほどの精神的なダメージを与える。

それが、この【アルカナ】の力だ。

他人の精神に干渉する魔法として、強制魂乱ギアスという魔法がある。

あらゆる生き物は、肉体と魂に分解することができる。

肉体は肉体的な活動を司り、魂は精神活動（感情の動き、記憶など）を司る。

この二つは切っても切れない関係であり、どちらか一方でも足りなくなれば、死に至ることになる。

そして、この魂も、最小単位まで分解すると【虚数原子】に分解が可能なのだ。

魔法を使う際に放出しているのはこの【虚数原子】である。

自分の魂の形を維持するのに必要な【虚数原子】の量は魂が最大に所有する【虚数原子】の量より少なく、その余剰分を魔法の使用に回しているのだ。

そして、魂も【虚数原子】の集合体であるという原理を利用するのが、ギアスの魔法である。

術者の魂の一部を【虚数原子】に変えて、対象者の魂に直接送り込む。

すると、対象者の魂は、他人の【虚数原子】を自分の魂に取り込んでしまうのだ。

こうしてしまえば、術者は好きなときにその【虚数原子】を利用し、対象者の魂に干渉できる。

ここから先は術者の技量によるが、何となく不安にしてみたり、究極的には洗脳も可能だ。

もちろん、そう簡単に使えるわけではなく、長々とした詠唱と、莫大な【虚数原子】が必要になる。

特性上【共有魔法】で発動できないため、個人で使えるとなると相当な才能の持ち主だけに限られるだろう。

それに似た効果を、この【アルカナ】は恐ろしいほど簡単に、術者の【虚数原子】消費すらなく発動できる。

【アルカナ】は世界に満ちている【虚数原子】を直接取り込んで効果を発動するのだ。

魔法法則の例外。

神の奇跡を体現する【神器】。

それが、【アルカナ】。

【サンク・エルス聖教団】が取り戻そうとしていた【アルカナ】はオディフィルを所有者として選んでいたのだ。

オディフィルの持つ【アルカナ】。

【No-?? The Devil】悪魔のアルカナ【フォルメレディクト】である。

「ぐうう、があ、あ、あああああああ！」

ソウヤは一際大きな声で悲鳴を上げ、そのままぐったりとなった。

「あ………」

アリエルが声を上げて駆け寄ろうとするが、その肩をオディフィルが掴む。



「お父様！」

「殺してはおらん」

吐き捨てるように言うと、王座から立ち上がる。

そして、【インペリアルフォース】の団長、ルーク・アイシュに命を下す。

この男は、オディフィルの政策に逆らって降格させられた前団長の後釜に抜擢された【天人】の男で、当然国王派である。

「ルーク、インペリアルフォース二千を率いてエルトーナへ向かえ」

「拜命致します」

「コクヨウ。その男を片付けておけ」

「はっ」

アキトに似た顔立ちの男、兄のタクトが頷く。

「では、これで解散とする。

各自、国の安寧のために力を尽くして欲しい」

そう言うと、オディフィルは王の間を出て行き、躊躇いがちにアリエルもその後続く。

王がいなくなるのを確認した後、タクトは急いでソウヤに駆け寄った。

.....

「お父様！」

オディフィルの私室に下がるなり、アリエルは父王に食ってかかった。

「何だ？」

「アルカナを使うなど、あの人が死んだらどうするおつもりですか？」

「殺してはおらんと申しただろ。死んだところで問題もないのだがな」

オディフィルの言葉は、どこまでも冷たかった。

「アリエル。お前もあれに関わるのはやめにしろ。いいな」

オディフィルはそれだけ言うと、立ちつくす娘には目もくれずに立ち去った

「お父様.....どうしてなの.....」

アリエルの悲しみに満ちた呟きは、父に届くことなく、消えていった。

次回>第二話B「エルトーナ防衛戦」

<簡易キャラクター紹介>

名前：オデイフィル・セオニア

年齢：46

髪の色：茶

瞳の色：碧あおみどり

種族：人間

戦闘スタイル：アルカナ使い

名前：アリエル・セオニア

年齢：17

髪の色：栗色

瞳の色：碧

種族：人間

戦闘スタイル：？

ガイド・カスター

年齢：26

髪の色：灰色

瞳の色：紫

種族：人間  
戦闘スタイル：情報戦

## 第二話A「王国の支配者」（後書き）

ワンシーンの会話で一話か……いつまで説明回が続くんだろう。

作中の歴史とかはほとんど裏設定みたいなもので、割と読み流したので大丈夫ですけど。

ちなみに、最後のキャラ紹介にでてくるのはそれなりに話に関わってくる人のみです。

ここに名前のない人は、それほど出番はないですね。

## 閑話

皆さんこんにちは。

【グラスムーン】副団長を務める、トワ・ミカゲと申します。

【グラスムーン】の広報活動の一環として、セオニア王国戦記の世界観の一部について私が解説していこうと思います。

主に、話に出てくるけど本編には当分、あるいは全く絡んでこない事柄についての補足説明ですので、興味のない方は飛ばしても全く支障はないと思われます。

では、始めましょうか。今回は、【アード教】についての話です。

あ、タイトルコールをお願いします。

……え？ これ、言わないといけないんですか？

……わかりました。

……せ、せーのっ。

セオニア王国戦記閑話「教えて！ トワせんせー！」  
第一回「アード教ってなあに？」

さて、始めましたね。

いえ、むしろ始まってしまったという感じなのですが……今更文句を言っても仕方ありません。

私は自分の仕事をするだけです。

まずは、【アード教】の発祥について見てみましょう。

【アード教】の歴史はかなり深く、今から千年以上も遡ることができます。

当時は、世界が三つに分裂した直後で、今のように魔法理論が完成しているわけでもなく、大規模な集落も少なかったため、モンスター襲撃に怯えるような、かなり苦しい時代だったようですね。

そんなとき、【オーセリア大陸】東部の小村で、一人の少女が神託を受けたとされます。

彼女の名はミユール。

【アード教】を興し、【聖教国サンク・エルス】を建国した【聖女】と呼ばれるようになる少女です。

では、その【アード教】の中身に話を移しましょう。

【アード教】の聖典はミュールが神託の内容を書き記したとされる【萌芽典<sup>ほうがてん</sup>】です。

その内容には、大切な存在が三つ存在します。

一つは、白い鳥のような翼が特徴の、人を導く存在である天使。

もう一つは、黒い蝙蝠のような翼を持ち、人を墮落させる悪魔。

そして、唯一神である女神です。

ミュールは女神の名を生涯口にするのではなく、今でもその名前にはわかっていません。

この女神は、裁判神であり、死者の魂を裁く役割を持っているとされます。

そして、罪があるとされた魂は、その罪の重さに応じた罰を受けるそうです。

その罰は重く、最も軽い罰ですら、生きているときに受ける苦しみは何倍もの苦しみだと言われています。

そして、ここが大事なのですが、【萌芽典】によると、全ての人は罪人だとされるのです。

しかし、それは人のせいではなく、人に忍び寄り、悪をなさしめる悪魔の仕業のせいなのだそうです。



悪魔に墮落させられているとも知らない人々に重い罰あたえなければならぬことを悲しんだ女神は、自らの配下である天使を人の世界に送ります。

こうして、【アード教】の根幹をなす教えが完成されました。

『悪いのは人ではなく、悪魔』

『悪魔を倒せば、それによって犯された罪は天使によって赦される』

大まかに言えば、この二つですね。

当時では、モンスターがわかりやすい悪魔の形とされたようですね。

そして、ミュールの話は口コミで広がり、悪魔＝モンスターを敵として、それまでばらばらだった人々は急速に結束力を高めることになりました。

その後、ミュールは西方に女神の加護に護られる聖地があると言い、東方の村から大陸横断を開始します。

その途中で信者を取り込み、モンスターを討伐しながら聖地を目指す。

これが、本来の聖伐です。

こうして、多数の信者を率いて【聖地エイルサイレス】にたどり着いたミュールは、そこに【聖教国サンク・エルス】を建国しまし

た。

この後、ミュールが何をしようとしたのかは詳しく伝わっていないのですが、誰よりも強く、誰よりも賢く、誰よりも慈悲深い、完璧な人間だったと言われ、死後は女神によって神の座に招かれたとする説が有力です。

この後長い間、【アード教】はモンスターから人々を護る希望として存在し、信仰を得ることになります。

しかし、今からおよそ四百年前、少しずつ【アード教】の歯車は狂い始めました。

魔法理論体系の完成、大規模国家の誕生。

これらによって大陸はかなり安定し、モンスターと戦わなくとも一生過ごせる人が増えてきたのです。

しかし、モンスター＝悪魔を倒さなければ、人の罪は赦されない。そんな状態が長く続けば【アード教】は求心力を失ってしまいません。

困った【聖教国サンク・エルス】上層部は、悪魔を倒す専門の兵【天兵】を作り出しました。

そして、『悪魔は【天兵】が倒す。それに協力すれば、罪は赦される』と教義も変更されます。

この協力というのは、【天兵】の武装を整えることであったり、

拠点建設への援助であったりと名目は様々ですが、つまりはお金です。

さらには、買えば罪の赦されるといふ免罪符なるものまで登場することになりました。

都合よく解釈を変えられ、神の名を掲げた侵略戦争となった聖伐による武力恫喝によって、他国の国政に深く関わるようになります。

当時、【アード教】と政治を切り離せていたのは【エリトア皇国】【ハルバニア王国】その隣国の【ジェノア帝国】、それにヤマ列島の【連合国家ヤマ】くらいですね。

近年ではここに【セオニア王国】も名を連ねています。

政策転換はされましたが、これは陛下の【魔人】に向けた個人的な感情によるものですから、再び【アード教】との蜜月が始まるということはありませんでした。

それはともかく、こうして、信仰を売り物にする商業国家であり、信仰を武器にする武力国家であり、表向きには宗教国家な【聖教国サンク・エルス】が誕生したのです。

そして、それから約二百五十年後、誰一人予想もできなかったことが起こりました。

【三界統一】です。

【三界統一】後、一時的に世界は荒れることになりました。

最初に共存を目指そうという決定がなされたこともあり、大きな戦争などはなかったのですが、別の問題があったのです。

それは、現れた大陸に由来する新しいモンスターや病気などです。

今までの常識が通用しないこれらによって、人々の不安が増し、世界の情勢は悪くなりました。

そう、【アード教】成立の背景に似た社会情勢に陥ったのです。

悪いことが続くとき、その責任を押し付けられる相手がいれば、楽になる。

悪魔が悪いのだから、自分は悪くない、とそういうことですね。

かつてはモンスターが据えられたその生贄の座に、モンスター以上に悪魔に似た人々が据えられるのに、そう時間は必要ありませんでした。

そうして、現在まで続く、【天人】と【魔人】の確執が始まったのです。

ですが、近年社会情勢が落ち着いたのもあり、これを見直そうという動きも出ています。

十六年前に陛下が行った三族共存宣言も大きな波紋を起こしたようです。

今はまだ小規模ですが、何かきっかけがあれば、この見直しは一気に進むことになるかもしれませんね。

早くそんな日が来て欲しいです……。

それでは、今回の解説はここまでです。

また次回の……… 教えてトワ先生でお会いしましょう。

って、続くんですか、これ……

## 第二話B「エルトーナ防衛戦」

【パルティナ要塞】、地下八階の一室。

コウジたち【アビスナイト】の主要メンバーのうち、クレアを除く全員がそこに集まっていた。

「その情報、間違いないのか？」

「……前にもあったよな、この台詞」

「シン、茶化すな。それで、どうなんだ？」

「ええ、間違いありませんよ」

コウジに聞かれたリイダが頷く。

「ベルジーニアから送られた増援がノクトワール要塞で兵二千と合流しました。」

狙いは、エルトーナ自治区のようですね」

「エルトーナ？ 場所間違えてんじゃないかねえのか？」

と、シンが言うが、

「いえいえ、間違いありませんよ。王国の目標はエルトーナです」

「大層な自信だな。それも、お前の言う、確かな筋とやらの情報か？」

「それもありますが、この話は有名ですよ。援軍の方々が行軍中にあちこちで言っていたようですから。むしろ言いふらしていた節がありますねえ」

普通、軍の作戦目的は隠すものだ。

作戦の狙いが先に見破られては、対策を立てられてしまう可能性がある。  
がある。

それをわざわざ自分から明かすということは当然、

「何か狙いがあるってわけか」

「そういつことになりますね」

「……どう思うっ？」

コウジはカヤとレイナディアに問いかけた。

シンとクレアは完璧に、コウジはどちらかと言うと肉体労働派だ。

【アビスナイト】の頭脳労働はこの二人の仕事である。

「そっだな……まあ、畏だろっ」

「はい、そっでしょうね」

レイナディアが言い、カヤも頷く。

「狙いは、私たちをここから引つ張り出すことだと思います」

「ああ、要塞というのは攻め難く守り易い。攻める側が圧倒的に不利なものだ。

燻し出すという策は悪くないが、一度失敗した策を二度は使うまい。

そもそも、エリトピアに一度やられた時点で対策は取られているのだからな」

「ですから、エルトーナを襲撃をするという情報を流して私たちを要塞から引つ張り出し、平原で戦うつもりなんです」

「はー、色々考えてんなあ」

二人が口々に説明するのを聞いて、シンが感心したように呟く。

「でも、ばれちゃ意味ねえよなあ。こっから出なけりゃいいんだろ？」

「そ、それはそうなんですけど……」

カヤが困ったように答える。

「そう簡単な話ではない。もしも我々が出て行かなければ、王国軍は本当にエルトーナを殲滅するだろう。

そうなのは、我々は反乱軍でありながらエルトーナを見捨てたことになってしまう」

「俺の目的は敵を倒すことだけだ。別に慈善事業をやってるんじゃないんだけどな」



コウジがそう口を挟む。

「だが、それでは他の組織の協力が得られなくなってしまふ。獣王の爪にしても魔人解放戦団にしても、目的は魔人を護ることなのだからな。

ついでに言えば、我々に参加しようと思つる者の数も減ってしまうだろう」

一言で言えば同じ反乱軍でも、全てが同じ目的で戦っているわけではない。

大まかにわけると種類は二つ。

一つは【魔人】を護るために戦う反乱軍。

そしてもう一つが、【魔人】の敵である王国を潰すために戦う反乱軍。

最終的な目標はどちらも王国である点では同じなのだが、後者の方がより直接的で乱暴だ。

今回のエルトーナ侵攻を例にすれば、前者なら不利とわかっていても必ず出て行くが、後者なら傍観するという選択肢もある。

そして、代表的な反乱軍の【獣王の爪】や【魔人開放戦団】は前者であり、【アビスナイト】は後者だった。

【春の雪】は、【アビスナイト】と似た理念の反乱軍で、コウジはここに協力体制を取ることを狙っていたのだが、残念ながら【春

【の雪】の壊滅の方が早かった。

「出なければ封殺されるってことか。乗せられるのは気に入らないけど、しょうがないな」

兵三千を有する【アビスナイト】は大規模な反乱軍だが、反乱軍にしては大規模なのであって、王国軍とは比べるべくもない。

まだまだ兵力が必要なことは、コウジもわかっていた。

「結局、どうなったんだ？」

「出陣するってことだ」

よくわかっていなさそうなシンに答え、

「そういうことだ。他のところには、アビスナイトはエルトーナを護るって、情報を運んでくれよ」

と、リィダに言った。

彼はあくまでも情報屋であって【アビスナイト】のメンバーではない。

危険な作戦行動には同行せずに、他の組織に情報を運びに行くことだろう。

「正確な情報伝達が私の主義なんですけど……。  
ま、いいでしょう。結果を見れば嘘にはならないでしょうから」

「あ、おい待て」

そう言って、出て行くこうとするリィダをコウジが呼び止める。

「どうかしましたか？」

「まだ肝心のことを聞いてないだろうが。王都からの援軍ってのは、誰だ？」

「インペリアルフォースですよ。グラスムーンではありません」

「へえ、てっきり出てくると思ったんだけどな」

【インペリアルフォース】は王都防衛を主任務にする軍だ。

出てくるのなら【グラスムーン】だと思っていたのだが。

「グラスムーンの団長さんは王の命令を拒んでお仕置きされましたから」

「……いったい、どこからそんな情報を持ってきてんだ、お前は」

そんな王国の内部事情まで、少し知りすぎではないだろうか。

「それは秘密ですよ。教えてしまったら商売になりませんから。では、私はこれで」

リィダが一礼して部屋を出て行く。

それを見送り、

「カヤ、レイ、作戦は任せろ。」

「シン、俺たちは出撃の準備に行くぞ」

「はいっ」

「ああ」

「おうよ」

三者三様の返事を受けて、【アビスナイト】の二度目の戦いが決定した。

セオニア王国戦記

第二話B「エルトーナ防衛戦」

そして、一夜明け。

【アビスナイト】は【エルトーナ魔人自治区】の正面に陣を展開していた。

【エルトーナ魔人自治区】は人口五百足らずの小村だ。

四方は共に平原で、伏兵などの隠しようはない。

後衛にカヤが率いる約六百の魔術師、その左右に馬に乗った騎兵を約二百ずつ。

そして、その前に二つに分けた前衛を配置する。

最前列はシンが率いる鎧に身を固めた重装兵約千。

機動力は低いが、高い防御力を持ち、相手の勢いを止めるための兵だ。

その後ろに、状況に応じて動く軽装兵約五百。

この部隊の指揮を執るのがコウジとレイナディアだ。

総数はおよそ二千五百。残りは【パルティナ要塞】の防衛のために留守番をしている。

作戦としてはいたって単純で、重装兵を壁にして敵を止め、抜けた敵兵を後続の部隊が討ち取るというものだ。

そして、今、【ノクトワール要塞】から派兵された王国軍がその陣に迫っていた。

王国軍は【インペリアルフォース】と【ルートシールド】の混成軍約四千。

急ごしらえで連携など望めないため、混成軍ではあるが最初から

二つに分けてしまっている。

先に立つのが騎兵を中心とした【インペリアルフォース】。

約千五百の兵を横二列に長く並べている。

その後ろに【ルートシールド】の二千の軍が続く。

こちらは歩兵が中心で、四人の歩兵に魔術師一人の五人を一単位にした集団の集まりで構築されている。

そして、最後尾につくのが精鋭五百騎に守られた総指揮官、ルーク・アイシュだ。

「ルーク様！ エルトーナの正面にアビスナイトの陣を確認しました！」

ルークの下に、その報が届けられる。

「ふ、餌に釣られてのこのこ出てきたようですね」

「どうなされますか？」

「そうだな……よし、前衛の行軍速度を上げて突撃させよ！」

「しかし、それではルートシールドがついていけません……」

と、ルークと並んで馬を走らせる【ルートシールド】の副団長が言う。

団長は【ノクトワール要塞】を離れられないため、彼がその代理としてこの戦場に赴いているのだ。

「まず我が軍が騎兵の速さで敵陣営を崩し、その後でルートシールドで押しつぶすのですよ。異存がありますか？」

「……いえ」

実際には異存がありまくりだったが、総指揮官がそう決めてしまったならば何を言っても仕方がないと、副団長は口を噤んだ。

騎兵の持ち味は突破力で、乱戦状態ではあまり役に立たないため一応理に適ってはいるのだが、それだけではない。

この指揮には、ルークの思惑がわからさまに透けて見える。

ルークは手柄が欲しいのだ。

前団長の失墜で、団長に上り詰めたのはいいが、ほとんどの問題を【グラスムーン】が解決してしまい、王都防衛の【インペリアルフォース】には出番がない。

出番がなければ、当然功績も無いわけで、ようやく手に入れたこの戦場で、手柄を立てておきたかった。

そのためには、自分の軍である【インペリアルフォース】を先行させる必要があったのだ。

ルークの作戦をより正確に言うと、インペリアルフォースで突破して敵指揮官を討ち、面倒な殲滅戦はルートシールドに押し付け

る』ということになる。

ルークの指示は、すぐに前衛に届けられた。

先行する【インペリアルフォース】がぐんと速度を上げる。

「正面の敵は固い！ 側面に回って置き去りにしてやれ！ 散解！」

実際の指揮を執る部隊長の命で、騎兵が左右に展開していく。

……………

「来ましたね……………」

【アビスナイト】の後衛で左右に分かれていく騎兵を見たカヤが  
呟く。

「ですが、そうはさせません」

カヤは右腕を天高く掲げた。

カヤは【アビスナイト】最強の魔術師だ。

速い上に広い範囲に展開されると、魔法攻撃では非常に捉えにく  
い。

こういう状況では連射の利く弓の方が便利なのだが、ある事情か  
らこの軍には弓兵が存在しない。

だが、やりようはある。



「赤き彩 疾き者の足を止めよ 求めるは猛火 立ち塞がれ 双壁  
となつて燃えよ 炎壁<sup>ファイアウォール</sup>屹立！」

【アビスナイト】の前衛の両端から【インペリアルフォース】に向かつて、斜めに炎の壁が立ち上がる。

展開しかけていた【インペリアルフォース】の騎兵は、突然目の前を塞がれる。

「う、うわああ！」

対応できずに炎の壁に突っ込んだ騎兵が馬ごと焼き尽くされる。

騎兵部隊は進路を変更するが、炎の壁に進路を限定され、重装兵の待ち受ける前衛に突っ込むことになる。

「来たぜ！ 戦闘準備！」

シンが命令を下し、重装兵たちが盾を構えて槍を突き出す。

「怯むな！ 突き崩せ！」

【インペリアルフォース】の方でもそんな声が響き、戦端が開かれた。

槍衾を形成する【アビスナイト】とそこに突貫する【インペリアルフォース】。

「魔法攻撃で穴を開ける！」

専門の魔術師ほど得意ではなくとも、魔法を使える者は大勢いる。

【インペリアルフォース】から魔法が乱れ飛び、重装兵を吹き飛ばし、そこからの突破を狙う。

「前衛に魔法障壁を展開。右が抜かれるぞ、そちらの穴を埋めろ」  
少し後ろからレイナディアが指示を出す。

前衛に防御魔法が展開され、相手からの攻撃魔法と拮抗する。

一進一退の攻防を続ける最前列に、後衛から援護の魔法攻撃が飛ぶ。

攻撃に集中していた騎兵隊は何の防御もなく攻撃を受け、兵たちが怯む。

「おっしやあ！ 突っ込め！」

シンが斧を振り回しながら叫び、シンの近くの重装兵が前進する。

「穴が開いたぞ！ 進め！」

シンが前進してできた穴を抜けて、敵の騎兵が陣営の中に侵入する。

「あ、てめえこら！ 俺を無視してんじゃねえよ！」

と、シンが叫ぶと、そこに一騎の兵が向かう。

「だったら俺が相手をしてやるよ！」

そう叫ぶや、馬上で槍を構え、一直線にシンに突進する。

十分に速度の乗った、高速の一撃。

だが、シンの近くに寄った瞬間、その動きが不自然に遅くなった。

「遅えよ！」

獰猛な笑みを浮かべたシンが大斧を一閃。

兵士は下半身を馬に残したまま、上半身だけになって地面に落ちた。

だが、そうしている間にも、シンの空けた穴に【インペリアルフォース】兵が殺到する。

「あの馬鹿！ 前列は壁だと言っておいただろう！」

「シンだからなあ……」

それを見て、レイナディアが怒り、コウジは苦笑する。

「俺がフォローに行く。ここは任せた」

「わかった」

「よし、最前列の援護に向かう。ついて来い！」

コウジが手勢を率いてフォローに向かい、再び敵を押し返す。

前衛は大混戦だった。

.....

「あ.....」

カヤは、自分の作り出しておいた炎の壁が消されたのを感じて短い声を上げた。

【ルートシールド】が追いついてきて、その魔術師によって消されたのだ。

「皆さん、敵が来ました。作戦通りをお願いします！」

周りの魔術師に声をかけると、一斉に魔術師たちが動き出す。

カヤはそれを確認して、次の魔法の準備を始めた。

「赤き彩 疾き者の足を止めよ 求めるは猛火 立ち塞がれ」

.....

【ルートシールド】の参戦で、前線は【インペリアルフォース】が優勢に戦いを進めていた。

「だー、もう、わらわら出てくんじゃねえよ！ 鬱陶しい！」

「同感だけどな、お前は戦い好きだろうが」

ぶつぶつ言いながら斧を振るシンに、自らも剣を振るいながら「ウジが言う。」

「俺は、一対一で、強え奴と戦うのが好きなんだよ！」

と、叫び返すシン。

そのとき、鋭い音をあげる矢が空に放たれた。

レイナディアの鎗矢だ。

「シン、ここまでだ。退くぞ」

「俺に逃げるとか下がるとかそんな選択肢はねえ！」

「面倒な奴だな……。だったら後ろに向かって前進だ！」

「……しかたねえな、わかったよ」

コウジとシンが退き、それに合わせて前衛の兵も後退する。

【インペリアルフォース】が追撃しようとするが、その前に再び炎の壁が燃え上がった。

カヤのファイアウォールである。

一度目は詠唱にアレンジの入った複数の炎の壁だったが、今回は一枚だ。

同時に、後衛に控えていた騎兵が駆け出し、王国軍の側面に展開する。

ちょうど最初の炎の壁があったところに騎兵の壁ができた感じだ。

さらに、その騎馬には、人が二人乗っていた。

一人は当然騎兵。

もう一人は、後衛にいたはずの魔術師だった。

馬が駆けている間になされた詠唱が括られ、燃え上がる。

ファイアピラー  
炎柱屹立の魔法。

騎兵の前に炎の柱が立ち上り、壁のように連なる。

カヤのレベルで魔法を使える者がいないがための代替策だ。

これによって、王国軍は、三方を炎によって塞がれたこととなった。

.....

「これは.....」

ルークの側を離れ、【ルートシールド】の指揮に来ていた副団長は状況を悟って息を飲んだ。

【アビスナイト】の兵は後退し、先ほどまでの乱戦は影も形もない。

戦闘の途中でありながら、開戦時のように陣容が綺麗に分かれてしまっている。

それが意味するのは

前方の炎の壁が消え、その向こうには、一人の少女が立っていた。

足元には巨大な魔法陣が広がり、莫大な量の【虚数原子】に干渉が行われている。

「このタイミングで大規模魔法攻撃だと……っ。」

全軍、密集防御体系。対戦術魔法障壁展開準備、急げ！」

指示に従って、【ルートシールド】の兵が集まり、防御の準備を始める。

【インペリアルフォース】の兵士が右往左往しているが、そちらにまで気を回す余裕はなかった。

……

「虚無たる終焉を誘う闇よ 冥府より我が下へ 命を喰らい滅びを呼び 我が意を通す力となれ」

長く響くカヤの詠唱が、終わる。

「リンズジャッジ終焉審判！」

天空に漆黒の魔法陣が刻まれ、その中心に集った闇が剣状に収束する。

「魔法障壁展開！」

王国軍の魔術師達が一齐に術を解放し、軍を覆う半球の結界を作り出す。

次の瞬間、天から墮ちた闇の剣が結界に激突した。

稲妻のような光が辺りに飛び散り、突風が吹き荒れる。

だが、結界は役割を果たし、闇の剣を防いでいた。

さすがに正規軍と言うべきだろうか。

結界は、単純な破壊力ならカヤの扱った魔法の中で最も高いルインズジャツジを防ぎ切った。

闇の剣が消え去り、結界もまた役目を終えて消えていく。

「あれを防ぐか。大したもんだな」

と、カヤの後ろに立っていたコウジが呟く。

「まあ、そこまでだけだな」と続けて、こちらを見ている指揮官らしき男に向かって、上を指差して見せた。

律儀な相手なのか、その男は空を見上げた。



そこには、赤い翼をはためかせるレイナディアの姿がある。

手には、美しい装飾のなされた白い弓。

レイナディアは、矢を番えぬまま弓を天に向かって引く。

「天空の星々よ 流れて降り注げ プレアデス！」

その、（トビ）鍵詞と共に。

弓の中心に埋め込まれた黄色の珠が輝き、限界まで引き絞られた弓には、【虚数原子】で構成された輝く矢があった。

「あれは……まさか……」

天空に向けて矢が放たれる。

そしてその直後、太陽が輝く空に、まるで夜空に光る星々のような無数の光が煌めいた。

その輝きの一つ一つが光の矢であることに気がつくのに、それほど時間はかからなかった。

魔法を使ったわけでもないのに、これだけの現象を起こす。

「アルカナ、だとお」

それが、彼の最後の言葉になった。

防御魔法は今使ったばかり、再び魔法を詠唱する暇など与えられない。

豪雨のように降り注いだ矢が、一瞬にして何百もの命を奪い去る。

その戦果を確認もせず、レイナディアは再び弓を構えた。

【No-?? The Star】星のアルカナ【プレアデス】を。

.....

光の雨が降り注ぎ、【インペリアルフォース】【ルートシールド】の混成軍が瞬く間に数を減らされていくのを、ルークは信じられない思いで見ている。

後方にいて被害を免れたルークの陣に、レイナディアが弓を向ける。

「ひっ  
」

あれだけの死を撒き散らされた武器を向けられ、ルークは引きつった声を漏らした。

「て、撤退です！ 全軍撤退！」

言っや否や真っ先にルークは馬を駆った。

周囲の兵からそれにつき、戦場を逃げ出していく。

【パルティナ要塞】に続き、ここ【エルトーナ魔人自治区】でも、  
王国軍の敗北が決定した瞬間だった。

次回＞第三話A「夜を裂く者」

### 第三話A「夜を裂く者」

【セオニア王国】王城。

【ベルジーニア】にそびえる王の住まいであり行政府である王宮を中心として広大な敷地をもつ建物だ。

敷地の中には、現在は閉鎖中の【アード教】大教会、軍に所属する者の寝泊りする兵舎、そして、その兵の訓練場などが存在する。

そのいくつか存在する訓練場の一つ。

土のフィールドを柵で囲んだだけの、主に武器訓練をするための場所を使って、【グラスムーン】の面々が訓練を行っていた。

気合の入った声が響く中、フィリスは柵にもたれて手の中の直槍を弄んでいた。

「フィリスさん」

ぼんやりとしていたフィリスに声がかけられた。

見ると、手に剣を持ったトワが立っている。

「私でよければ、相手になりますか？」

「そうね。お願いするわ」

フィリスはそう答えて柵から背中を離れた。

訓練をするために、空いている場所を探して移動する。

「すみません」

その途中でトワが言う。

「んー？ 何が？」

「いえ、兵の皆がフィリスさんを避けるような態度をして」

「あーそれね。別にトワちゃんが謝ることじゃないっしょ。

ま、仕方ないわよ。あたしはこんなんだからね」

からからと笑って、背中の翼を揺らす。

実体の翼。

これが、フィリスの立ち位置を複雑なものにしていた。

【天人】からすれば、自分たち以上に天使らしい厄介な存在、【グラスムーン】を構成する【魔人】からすれば、忌々しい【天人】のような存在。

【アード教】の本拠である【聖教国サンク・エルス】なら祭り上げられるかもしれないが、ここではそんな微妙な扱いなのだ。

【天人】【魔人】のハーフであるソウヤは受け入れられているのだが、それは【グラスムーン】創設からの彼の行動によるものだ。

フィリスが【グラスムーン】に加わってからはまだ一年足らず、打ち解けるにはまだ時間が足りていなかった。

「それに、こっちから声かければ相手はしてくれるしね。今日はちょっと考え事してただけなのよ」

フィリスがそう言うと、トワは「そうですか」と頷いた。

「報告にあった、赤い翼の少女、ですか？」

「ええ。この国に降りたから、どこかにいると思ってたけど、予想が外れてなくてよかったわ」

「確か、フィリスさんはその人を探すためにここにいたんでしたね」

「まーね。私は、彼女を救うために降りてきたわけだし」

「どうするつもりですか？」

「そうねえ、ま、そのうち会うことになるだろうし、今すぐどういうとは考えてないかな」

「そうなんですか」

と答えたトワの顔を、フィリスが覗き込む。

「トワちゃん、今ちょっと安心したでしょ。もしかして、あたしがあっちに行っちゃうとか思ってた？」

「あーあ、あたしって信用ないな」

「そんなことはありませんよ」

わざとらしくそんなことを言うフィリスに、冷静に返すトワ。

「ちえ、相変わらず冷静沈着、つまらないんだ」

フィリスは不満そうに唇を尖らせる。

「可能性の一つとしては考慮していましたけど」

「ちよ、思ってたの！？ 酷っ」

オーバーリアクションでうな垂れるフィリスを見て、トワは薄く微笑んだ。

「ふふ、でも、フィリスさんならそんなことは言わないと信じていましたよ」

「あ、そうなんだ……」

「拗ねないで下さい。信頼しています、フィリスさん」

「はいはい、どうもありがとうございます」

「もう、機嫌直してください」

「拗ねてなんかないもーんだ」

などと言いながら歩いていく。

その後ろで、兵士たちがこんなことを言っていたことを、二人は知らない。

「よっしゃ！ 副団長の笑顔ゲット！」

「ぐあ、しまった見逃した……。団長と一緒にじゃないときは盲点だった……」

「いいよなあ団長。俺らはたまにしか見られない副団長の笑顔を独り占めなんだぜ……多分」

すっかりレアアイテム扱いになっているトワの笑顔なのだった。

## セオニア王国戦記

### 第三話 A 「夜を裂く者」

「う……………」

小さく呻きながら、ソウヤは目を覚ました。

見慣れた天井が眼前に広がっている。



どうやら、自分の部屋のベッドに寝かされているようだ。

オディフィルの【アルカナ】で意識を失った後、誰かが運んでくれたらしい。

まあ、王の間に放っておいても邪魔というか目障りだから当然ではあるが。

王国の一軍を預かる団長の倒れている王の間とか怖すぎる。

「どれくらい寝ていたんだ……？」

返答を期待していたわけではなく、ふと疑問を漏らしたただけだったのだが、

「一日だよ。今はソウヤが倒れた次の日のお昼くらいかな」

と、答えが返って来た。

ソウヤが横を向くと、

「おはよう、ソウヤ」

なぜかサンドイッチ片手の王女様がそこにいた。

普段は部屋の隅に片付けている椅子とミニテーブルを引っ張り出して、そこに座っていた。

見慣れたドレス姿だが、膝から下の部分がぱっさりなくなっていて、白い靴下を履いた足が見えている。

このドレス、裾のフリルや装飾が外せるようになっていたり、やたらと隠しポケットがついていたりするのを、ソウヤは知っている。ミニテーブルの上には、サンドイッチの乗った皿と、食べるために外したらしい長手袋、そして普段は額を飾っているティアラが置いてあった。

口調でわかっていたことではあるが、それを見て確信する。

今のアリエルは、公私で言うところの私。

本人曰く、ティアラのあるなしで王女と素の自分を使い分けているらしい。

だから、ソウヤも格式ばらない態度で返事を返す。

「アリエル、どうしてここに？」

「お見舞いにくらい来るよ。具合は？ 大丈夫？」

「ああ、少し頭が重いけど……」

笑えない話だが、【フォルメレディクト】を受けるのは今回が初めてではない。

これくらいなら許容範囲内、というか、いつものことだ。

アリエルに答えながら体を起こそうとする。

「あ、ダメだよ。まだ寝てないと」

椅子から身を乗り出したアリエルに肩を押さえられた。

そのままベッドに押し戻される。

勢い余ったのか、不満と心配を足したような表情のアリエルの顔が、目の前に近づく。

「そんなに心配しなくても、大丈夫だ」

ソウヤがそう言ったとき、アリエルの顔がくしゃりと歪んだ。

二人の距離が近づき、アリエルはソウヤの肩に顔を押し付けた。

「……心配、したんだよ」

声も体も震えさせて、アリエルが言った。

「死んじゃうんじゃないかって思ったんだよ？」

「……すまない」

「ううん、ソウヤは悪くないよ……」

アリエルは顔をうずめたまま首を振った。

さらさらの髪がソウヤの頬をくすぐる。

じゃあ誰が悪いのか、には二人とも触れなかった。

王とは絶対の法だ。

例え、誰が正しくないと思っても、王の言葉が正しいのだ。

それに、とソウヤは思う。

もしもエルトーナの【魔人】が反乱軍に加われば、自分は彼らを斬るだろう。

それを己の心が望むまいと、彼らが無辜の人々を苦しめるなら、殲滅もやむなしとするだろう。

国民のことを思うなら、あの場で拒否しようとして、結局同じことなのかもしれない。

だが、その国民には【魔人】が含まれない。

そう思うと、また、何が正しいのかは遠ざかってしまう気がした。

「ほんとに、無事でよかった……」

アリエルはそう言って、ソウヤから身を離れた。

目の端に浮かんだ雫を拭って、椅子に座り直す。

「とにかく、今日は一日休んで。わかった？」

「わかったよ。今日は大人しく寝ておく」

横になったままソウヤが答えると、アリエルは満足そうに「うんと頷き。」

「じゃあ、私は行くね。そろそろ戻らないとだし」

言いながら椅子の背にかけていたスカートの裾を取り、スカートに取り付ける。

長手袋を着けながら椅子から立ち上がり、

「あ、そうだ。ソウヤ、お腹空いてない？ このサンドイッチ食べるっ。」

「そうだな、後で頂こう」

「それなら、このまま置いていくね」

「ああ。と言うか、そもそもどうしたんだ、それ」

サンドイッチを持ち歩いている王女様。

よく考えると、かなり変だ。

「これ？ パーティを抜け出すときに持ってきたんだよ」

「パーティ？」

「うん、その……インペリアルフォースの壮行会と言うか、先取りした祝勝会みたいな……」

言いにくそうに言うアリエル。

出撃が決まったのは昨日のくせに、暢気に壮行会なんてやっているらしい。

が、それが今の国の現状を表していると言えた。

反乱軍など、一部の者が徒党を組んで暴れているだけ。

正規軍の敵ではなく、本腰を入れれば簡単に押さえられる相手ではないと誰もが思っている。

その牙が己の喉下に届くなど、夢にも思っていないのだ。

逆に言えば、反乱軍など、そんな考えがまかり通るほどの勢力ではないと思われていた。

そう、現時点では まだ。

「そう、か……その犠牲で、最後になれば……いいんだがな」

「……うん」

今はまだ、ソウヤとアリエルでさえ【アビスナイト】の敗北で終わると思っていた。

「ねえソウヤ。反乱を起こした人たちは、間違っているのかな？」

私、最近思うんだ。本当に悪いのは 「

「それは、俺にもわからん。国王に逆らうことそれ自体が罪ではあ

る、が、今の情勢でそれを一方的に罪と言つのはどうにもな

「アリエルの言葉を遮って、ソウヤは言った。

「アキトから聞いたんだが、春の雪のメンバーが『力を使ってでも話を聞いてもらおう』と言っていたらしい。

そうしなければ声が届かない現状にも問題はあるんだろう。

だが、その力によってただ普通に暮らしている誰かが傷つくのなら、俺は、それを罰するしかない」

「……それじゃあ、もしも、もしもだよ？

誰かが、普通に暮らしている人たちを傷つけずに主張を通す方法を使ったら、ソウヤはどうする？」

「そんな方法が、あるのか？」

「だから、もしもの話。そんなうまい話があったら苦労しないよ」

もしも、と言いながらアリエルの表情は真剣だった。

ソウヤは、悩みながらも、答えた。

「……もしそれが、国を変えて、今虐げられている人々にも平等な世界を作ることに通じるなら……それに賛同するかもしれない」

「でもそれは　きっと罪だよ？」

それはそうだろう。

オディフィルの方針に逆らうだけで罰せられかねない現状だ。

その行いは、法に照らせば間違いなく、罪とされるだろう。

「……それがより多くの人の救いになるのなら、俺は 罪を犯す覚悟がある」

きっぱりと言い切るソウヤ。

言いはしないが、反乱を起こした相手を殺すことでしか止められない、起こさせてしまうこともまた罪だと思っている。

問題は、どちらの罪を選ぶかなのだ。

「そう……」

呟くアリエルは、ソウヤの返答に何を思ったのか。

それは、結局わからなかった。

「ヒノカミ団長！」

と、声を出したアリエルはティアラをつけた王女モード。

それまでであった空気を、根こそぎ払ってしまった。

「今後もお前には働いてもらわなければならない。ゆっくり体を休めておけ」

「はっ、お気遣い、ありがとうございます」



ソウヤもそれに合わせて言葉遣いを改める。

まあ、ベッドに寝たままで微妙に不敬なのだが。

「あ、アリエル様」

「何だ？」

「料理を持ち出してパーティを抜けるのはどうかと思いますよ。誰が見ているかもわからないのですから」

ソウヤとしては、アリエルの評判を変に落とさないようにと気を使ったのだが、

言われたアリエルはかあ、と頬を赤く染めて、

「し、仕方ないだろう。会場では誰かしらが話しかけてきて何かを食べる余裕などなかったのだ。」

私とて料理を持ち出すのはどうかと思っただが、王女がお腹を鳴らすわけにもいかないだろう。

そもそも、朝食を取れなかったのは、お前の様子を見に来ていたからなのに」

などと早口で呟き、

「ソウヤのいじわるっ。馬鹿あー！」

とか叫んで部屋を飛び出して行った。

残されたソウヤは「？」と首を捻り、

「切り替えられてないが、大丈夫か？」

と、呟くのだった。

その夜

ソウヤは兵舎から出て外を歩いていた。

手を組んで腕をぐつと伸ばす。

アリエルのお願い＋命令もあつて、丸一日休んでしまった。

じつくり休めたのはありがたかったが、実質二日も寝ていただけあつて、体が固まってしまっていた。

そういう訳で、少し体を動かそうと散歩に出てきたのだ。

兵舎から王宮の正面門を抜ける。

そこには、明るい月の光に照らされて、一面の花畑が広がっていた。

四年前に死んだオディフィルの妻、王妃エリアス・セオニアによって設計された庭園である。

中心に噴水、その周りにいくつかのベンチを置き、その外側に花壇が配置されている。

どの季節でも花が耐えないように計算された花壇は、エリアスが死んだ今も、生前と同じように保たれていた。

「ん？ あれは……」

庭園に出たソウヤは、花壇の側に見知った後姿を見つけた。

「トワ？」

「ソウヤ？」

声をかけられたトワが振り返る。

「もう起きていたのですか？」

「ああ。心配かけたな」

「いえ、ソウヤが無事ならそれで。

でも、これは無駄になってしまいましたね」

そう言ったトワの手には、一輪の花が握られていた。

花壇に植えられている花にそっくりだが、花はもちろん、茎も葉も透明で月の光にきらきらと輝いている。

「氷の花？」

「はい。ソウヤのお見舞いにと思ったのですが、この花壇の花を取るわけにはいきませんから」

だから氷で作っていたんです、とトワ。

言うのは簡単だが、実際やるのは並大抵ではない。

ここまで繊細な氷細工を作るとなると、はっきり言って彫る方が楽だ。

実際、ソウヤにはどんな詠唱で作ったのかさっぱりだった。

「トワ」

「はい、何ですか？」

「良かったら、それ、貰ってもいいか？」

「でも、もう大丈夫なのではないのですか？」

「それはそうだが、せっかく作ってくれたんだろっ？」

「ソウヤがそう言うなら　どうぞ」

「ありがとうございます」

ソウヤは、受け取った氷の花を服の胸ポケットに収めた。

「固定の言霊を含めているのでしばらくは持ちますが、そのうち溶けてしまいますから、コップか何かに挿しておいた方がいいと思い

ます」

「そうか。わか トワ！」

ソウヤはトワを抱き寄せて地面に押し倒した。

その直後、二人の背後にあつたベンチの背がぎっくりと切り裂かれる。

気配は全く無かつた。

それに気がついたのは、ソウヤの戦士としての勘としか言いようがない。

ソウヤはトワをかばうように立ちながら腰に手をやり、そこに剣がないことに気づいて舌打ちする。

まさか、国の中枢である王城にいきなり敵が現れるとは思わなかつた。

そんなに警備がざるなのか、それとも、相手がそれほどの手練なのか。

ソウヤは襲撃者に目を向け、その姿に、目を疑う。

頭の両サイドで尻尾のようにまとめられているのは夜を溶かしたような深みのある黒髪。

細いシルエットの黒いワンピースのような服を着ているが、裾や袖が皮のベルトで留められていて、何だかよくわからない服になっ

ている。

「ありゃあ？ 避けられちゃった？」

場にそぐわない、暢気と言つか丸っこい感じの声。

その姿は、

「こ、子供？」

どう見ても、まだ子供だった。

その手に不釣り合いな幅広のナイフを握っていなければ、ただの迷子にしか見えなかっただろう。

「君は、何者だ？」

状況から言って、ただの迷子でないのは明白だ。

油断無く身構えながら、ソウヤは問いかけた。

「あ、ボク？ ボクはクレアだよ」

暢気な声で少女 クレアが答える。

「避けられるなんてボクびっくりだよ。お兄ちゃん、強いんだね。うーん、でも、見つかったらダメだからあ」

「だから？」

と思わず律儀に聞いてしまうソウヤ。

「目撃者は『きるぜんぶ』なんだから」

「き、きるぜんぶ？」

「kill them allでしょうか。三界分裂期以前に使われていた古代語ですね」

鸚鵡返しに返すソウヤに、答えるトワ。

「で、意味は？」

「……全員殺せ、ですから、皆殺しと言いたいのではないでしょうか。文脈的に」

「皆殺し……。こんな子供が皆殺しって……」

「ソウヤ、しっかりして下さい」

と言い合っていると、それを聞いたクレアが目を輝かせる。

「え、ソウヤ？ お兄ちゃんがソウヤ・ヒノカミ？」

「あ、ああ。そうだが」

「そっか。よかった」

にっこりと笑って、ナイフを構える。

「コウジお兄ちゃんに頼まれてたんだ。お兄ちゃんの暗殺」

「あ、あんさ……いや、それより……」

暗殺という言葉も十分気になるが、それ以上に気になる単語があった。

「コウジ？ 君は、アビスナイトなのか？」

「そうだよ？」

それを聞いて、ソウヤは背後に庇ったトワに声をかける。

「トワ、他に侵入者がいるかもしれない。誰かに知らせてくれ」

「わ、わかりましたっ」

トワはその場から駆け出し、城の中に入って行く。

「んー、ボク一人だよ？」

「ここは大事な場所だから、念には念を入れさせてもらうっ」

「ボク嘘なんて言っていないのに。」

「ま、いつか。行くよお」

相変わらず声だけは平和そうだが、クレアの瞳が鋭く細められる。

両足と両腕を大きく広げ、手を地面につける。



その姿は、四肢を持つ獣よりもまだ低く、地を這う蜘蛛を思わせる。

「まがぐせ凶蜘蛛」

その言葉が落ちた瞬間、クレアの姿がかき消えた。

一瞬の後、ソウヤの目の前にナイフの刃が現れた。

クレアがソウヤの背中に抱きつくように、ナイフを伸ばしていた。

ソウヤは素早く斜め前に体を投げ出した。

地面で一回転して、素早く起き上がる。

「っ……」

ソウヤの右肩が切り裂かれ、服が赤く染まっていく。

だが、躲さなければ喉に口を作られていただろう。

（子供でも、敵は敵か！）

本気でやらなければやられる。

だが、既に視界の中にクレアの姿はない。

「魔法か……？」

「違うよっ？」

その声は真後ろから。

すぐに振り向くが、そこにはもうクレアはいない。

「だって、ボク魔法使えないもん」

（魔法が使えないだど！？）

魔法が使えない人は珍しいが確かにいる。

無機有機を問わず、魂 虚数原子結合体 を持たないものは  
いないが、身体の機能的な問題などで、それを放出できない人は存  
在するからだ。

魔法で無いということは、つまり、これは技術ということになる。

「それを教えてしまう、やはり子供か」

魔法でないと分かるだけで、姿を捉えられないいくつかの可能性  
が排除されて、それだけ対応策が考えやすくなる。

ソウヤは立ち位置を変えながら視点を巡らせるが、クレアの姿を  
捉えることはできない。

だが、クレアの方もソウヤの動きから隠れるのに手一杯でそれ以  
上攻められない。

暗殺と言うのは、気づかれる前に相手を殺すことにこそ意味があ  
る。

姿を見せて向かい合ってから暗殺を始めることに無理があるのだ。

「いるのはわかるが、姿は見えない。やはり、死角に回られているのか」

「うあ、ばれてるよ!」

ソウヤが呟くと、後ろから驚きの声が聞こえた。

どうやら、予想は当たっていたようだ。

クレアの使っている技、その名は凶蜘蛛<sup>まがくも</sup>。

腕、足、その他全身の筋肉をフルに使うことで高い瞬発力を生み出し、高速移動を行う技だ。

継続的な移動には向かないが、一瞬の機動力は凄まじいものがある。

クレアはそれを利用して、ソウヤの死角から死角へと移動しているのだ。

(だが、それがわかれば……)

ソウヤは向きを変えるのを止め、真っ直ぐに走り出した。

「あ、待てえ」

クレアがすぐにその後を追う。

ソウヤは庭園の中心近くで足を止め、

「光の剣 一閃に断て 一字裂光！」

ラインディバイド

「甘いよっ」

ソウヤが後ろ向きに放った横一文字の光の斬撃を飛び越え、クレアがソウヤに飛びかかる。

死角から来る。

だが、そのどこから？

真後ろか、右か、左か。

それは

「見えてるよ、クレア」

ソウヤが足を止めた場所。

庭園中心に配置された噴水の水に、クレアの姿が映し出されていた。

右後ろから迫ったクレアのナイフに、ソウヤがポケットから抜いた氷の花を合わせる。

トワが作り上げた氷の花は、クレアのナイフをしっかりと受け止めた。

ナイフを持っている腕を掴み、勢いを利用して投げ飛ばす。

「噓っ、ひゃああっ！」

投げられたクレアは空中で一回転し、上手く着地した。

「うう、まだまだ」

ナイフを構え、凶蜘蛛の姿勢に入り　しかし、後ろに飛び退いた。

その目の前に、一本の槍が突き刺さる。

空を見上げると月を背に翼をはためかせる少女の姿。

「ソウ君！」

上空からフィリスがソウヤに剣を投げ渡す。

「フィリスか！　助かる！」

ソウヤがフィリスから受け取った剣を引き抜く。

それと同時に、城の方からトワ、アキト、兵たちが駆けつけてくる。

「むむ、たぜーにぶぜーだね。ここは、撤退だよ」

クレアはそれを見るなり身を翻し、夜の闇の中に消えていく。

「アキト！」

「わかっている。彼女は僕たちが追いかける、君はその傷を治療してもらえ。フィリス、行こう」

「はいはい」

アキトとフィリスが兵を率いてクレアの後を追いかけていく。

入れ替わりに、トワがソウヤに駆け寄る。

「ソウヤ。傷を見せて下さい」

「ああ」

ソウヤが血に濡れた上着を脱ぐと、あらわになった傷口にトワが手をかざす。

「癒しの御手よ 生命の力を高め 刻まれし傷を癒せ 治力増活<sup>リカバリ</sup>」

トワの手から柔らかな光が放たれ、傷を癒していく。

とは言え、『傷を治す』という都合のいい魔法は存在しない。

身体強化の応用で、自然治癒力を高めているだけだ。

すぐに治せるのは骨折くらいまでで、致命傷のような傷にはほぼ意味がない。

血が止まったのを確認して、トワは手を離す。

「これで大丈夫だと思います」

「ありがとうトワ。俺たちもクレアを追っぞ」

「はい」

ソウヤとトワも加わり、クレアを追う。

だが、結局、クレアの姿を見つけることはできなかった。

次回>第二話B「孤独な戦い」

<簡易キャラクター紹介>

名前：クレア

年齢：？（見た目10歳くらい）

髪の色：黒

瞳の色：黒

種族：人間

戦闘スタイル：暗殺術

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3585i/>

---

セオニア王国戦記

2010年10月13日05時05分発行